帝国で斬る！

通りすがりの床屋

【注意事項】

このＰＤＦファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にＰＤＦ化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でＰＤＦファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

アカメが無辜の民ではなく最愛の妹を選んだｉｆの世界

設定や物語に矛盾があると感じたら教えてください

首吊って詫びますので

ええ、嘘ですよ？

目次

分岐点を斬る！ ―― 1
出逢いを斬る！ ―― 5
就職を斬る！ ―― 15
模擬戦を斬る！ ―― 24
首斬りを斬る！（前編） ―― 37
首斬りを斬る！（後編） ―― 48
帝都警備隊を斬る！（前半） ―― 61
帝都警備隊を斬る！（後半） ―― 75
褒美を斬る！ ―― 86
元大臣を斬る！ ―― 97
三獣士を斬る！（前半） ―― 106
三獣士を斬る！（後半） ―― 120
延長戦を斬る！（前半） ―― 132
延長戦を斬る！（後半） ―― 139
幕間　ある少年の記憶 ―― 154
幕間　それぞれの休息 ―― 160
結成を斬る！ ―― 173
拉致を斬る！ ―― 182
脱出を斬る！ ―― 190
初任務を斬る！ ―― 203
侵入者を斬る！（前半） ―― 219
侵入者を斬る！（後半） ―― 229

分岐点を斬る！

千年の栄華を極めた帝国
栄華とは必ず途絶えるもの
それが外からか内からかの違いでしかない
帝国も決して例外ではない
寧ろ、千年も途絶えることがなかったことを称賛するべきだろう
今や大臣オネストというたった一人の欲望の塊に腐敗させられた帝国にかつての栄華は見る影もない
民に重税を課し
人身売買を是とし
人殺しを娯楽とし
悪政を止めるものはなく
綺麗事を唱える者は粛正され
悪行が正義として罷り通る帝国に救いはない
選択の余地なく人生を縛られ家畜のように死んでいく人間が溢れかえる千年帝国

その少女は選ぶだけの力を有していた
だが選べるというのは必ずしも幸いなこととは限らない
選ぶというのは一つを拾い一つを捨てることだからだ
少女の前にある別れ道
「私と共に来いアカメ！この腐りきった帝国を我々の手で変えるんだ！」
帝国を無謀にも妥当せんとする、しかし、多くの弱者を魅せる道
それは紛れもない万人が讃える本物の正義であろう
「嘘だよねお姉ちゃん？私達を裏切ったりしないよね……？」
世界でたった一人の妹のすがる声
最愛の妹を見捨てることはアカメの心が忌避する
多くの罪なき骸を積み上げ妹を取る荊の道
どちらも血塗られた修羅の道となることだろう
アカメは二つの選択を前に意識が朦朧とする
選ぶことなど出来ない
無辜の民を外道共から救いたい
それためには己の命よりも大切な妹を捨てなければならない
吐き気がする

クロメは帝国に囚われている
薬がなければ生き長らえない
洗脳を解かねば帝国から離れることは叶わない
逃げることは許されない
目を背けることは出来ない
選択を他者に委ねることは叶わない
手を差し伸べるナジェンダ
手を伸ばすクロメ
二人の間でアカメは沈黙を続ける
時間だけが過ぎていく
やがてアカメは無意識で足を動かせる
革命軍の道に
たった一歩
それなのにナジェンダの手はすぐそこだ
「私より知らない人達を取るのお姉ちゃん……？」
夢遊病の患者のように歩むアカメは妹の涙に意識を引き戻される
そうだ今更光の道など歩めるわけがない

この手は正義を志した者の血に、仲間の血に、濡れているのだ
他の誰が許してもアカメがそれを許さない
「私は……そちらにはいけない」
アカメは選んだ
最愛の妹
ただ一人を取る道を
「そうか……残念だよアカメ」
ナジェンダは『浪漫砲台パンプキン』の引き金を引く
アカメは安堵のクロメを抱き抱え離脱する
もう迷うことはない
「お姉ちゃんお姉ちゃんお姉ちゃんお姉ちゃん！大好きだよ！」
「私もだよクロメ」
自分の胸の中に愛しい者がいるのだから
アカメは帝国に残り最愛の妹を守るために生きる覚悟を決めた
この覚悟は、もう揺るぐことはないだろう

出逢いを斬る！

『ナイトレイド』

名前の通り帝国の重役や富裕層の人間を標的に夜襲する殺し屋集団

全員が帝具使いの小数精鋭だという

暗殺部隊に所属するアカメの耳にまでその名は届いていた

アカメのナイトレイドへの心証は悪くない

彼等が暗殺しているのは帝国が裁かぬ人の皮を被った魑魅魍魎共だけ

殺されて当然の屑ばかり

アカメはどんな理由があっても殺しは許されないと甘えたことをいう偽善者ではない

彼等は殺すことで無辜な民草を救っている

そもそもアカメは革命軍自体応援している節もある

アカメが選んだのは帝国ではなくあくまでも妹ただ一人なのだ

革命軍などそのうち制圧されることだろうと思っていたアカメだったが予想外のことに革命軍は数年も帝国に苦汁を嘗めさせて続けている

帝国から革命軍に寝返る者、帝国の内から革命軍を手引きする者、革命軍の行動に目を瞑る者などが後を絶たない
帝国の腐敗はそれだけ根強く千年続いた帝国の終焉を多くの帝国民が心の底から望んでいるのだ
かくいうアカメもまたに見つけることがある革命軍のスパイなどを見逃している
歩き方から素人でないことがわかる者が増えている一般の兵士になら気付かれないだろうがアカメ程度の使い手にはただの旅行者ではないのが一目同然だった
焼け石に水とわかっているが彼等には頑張ってもらいたい
仕事で標的にならない限りの話だが
仕事になればアカメに一切の容赦はない
標的を迅速に葬ればそれだけクロメの負担が減る
重税に耐えかねて一揆を起こした村を皆殺しにすることも厭わず行った
革命軍の刺客に襲われることもあったが自分とクロメに仇なすなら葬るだけのこと
アカメとクロメは標的のリスト入りしているらしい
この事から暗殺部隊とナイトレイドがぶつかるような事態を危惧していたが今の暗殺部隊の頭が無能で助かったと言える
奴は暗殺部隊を道具としか見ておらず不正で得た金で贅の限りを尽くしているが大

臣に与えられる以上の仕事はしようとしない
悪事を積極的に行わない限りは革命軍が優先的に自分とクロメを襲ってくることもナイトレイドを送り込んでくることもないはずだ
クロメ達を薬漬けにしたビルならデータを取るためという口実で暗殺部隊とナイトレイドをぶつけたかもしれない
そうなれば暗殺部隊の仲間を見捨てクロメと逃亡していた
クロメに恨まれることになってもアカメは妹の無事を優先する
今のところ逃亡する心配はないが時間の問題だと思っている
約千年前に始皇帝が自分の死後も帝国を守りたいと莫大な財、権力、叡智を集結させて製造させた４８しかない兵器『帝具』
その規格外の性能ゆえ帝具の数で勝利の有無が決まると云われている
帝国を守りたいという願いで作られた帝具が帝国を滅ぼさんとする革命軍を支えているのだから皮肉なものだ
アカメとクロメは貴重な帝具使いだ
まだ戦力差があるためか力を蓄えてある革命軍が雌伏を終えたとき全面戦争が勃発するだろう
戦争になれば間違いなく駆り出される

それでなくてもクロメは薬によって体がズタボロなのだ
長くはない
仲間のカイリなど同年代にも関わらず老人のような出で立ちになっている
自慢の妹クロメも遠くない内に老婆になるかもしれない
尤もクロメは老婆になっても可愛いに違いないが
……老化はマシなほうだ
生きているのに変わりはない
酷い場合は衰弱し死ぬ
そうなり処理された仲間は腐るほど目にしてきた
実験台の中でも優れていたアカメを含む七人は元羅刹四鬼ゴズキに引き取られ天然の暗殺者として育った
帝国の真実を知ったアカメは薬による制限も洗脳による忠誠心もない
帝国を裏切るのは難しくない
だがクロメを守りながら逃げ切れる訳でもない
優先するべきは帝国と革命軍の行く末ではなく、最愛のクロメ
クロメを救うためにはどうすればいい？
薬を止めさせる？

否、半日ごとに服用しなければ禁断症状が出る
妹の苦しむ姿は見たくない
クロメを薬なしで生きていける真っ当な体に戻す手段
それを探す
いや、もうずっとずっと探している
革命軍の手を振り払ったあの日から
柄にもなく思考の海に身を沈めることが多くなったアカメは視野が狭くなった
故に起きた悲劇だった
「あ、すいません」
「……ッ」
道行く人にぶつかってしまった
それより重大なのはぶつかった拍子に手に持っていた食料(にく)を落としてしまったことである
昔のアカメなら有り得なかった失態だ
これが刺客ならば今頃アカメは亡き者になっていた
いや、言い訳がましいかもしれないが殺気だったならば咄嗟に身を翻せていた筈だ
思考と肉の至高のダブルサンドはアカメをここまで耄碌させたのだ

「私は……私はぁ……ッ！」
アカメは膝を突き慟哭の涙を流す
愚かな過去の自分を殴ってやりたい
肉よ
どうか愚鈍な私を罵ってくれ
お前から目を離してしまった不甲斐なさを笑ってくれ
こんなことで妹を守れるというのか
いあや、肉一つ守れない者に明日などこない！
「えっ？ちょ、泣かないでよ！変に注目されちゃうから！ほら、お詫びにお肉奢るから！」
慌てふためく少女に腕を引かれアカメは肉の前から姿を消した
アカメがその肉と出逢うことは、もう二度とない
※　※　※
「貴女、女の子なのによく食べるねぇ……」
「そうか？」
アカメの前には皿が高々と積み上げられていた
ぶつかってきた相手に非があるとはいえ容赦のない喰いっぷり

食べ物の恨みは何より恐ろしい
「しかし、これだけ食べてお金はあるのか？」
「あはは、心配なら食べる手止めるくらいしてくれてもいいんじゃないかにゃー」
「そうか……」
「あ、大丈夫！私、宮殿で侍女やってるからお金は結構あるからさ！そんな捨て犬みたいな顔しないで！食べた食べた！」
「そうか！」
「うん、なんていうか分かりやすい子だねー」
同じそうか、という言葉なのにニュアンスの違いが手に取るようにわかるくらいにわかりやすい
それが美点だとは妹の談
そして同じことをアカメは妹に言っている
やはり姉妹である
「宮殿か……」
アカメは考える
肉を奢ってくれる優しい少女が宮殿に跋扈する人外共の毒牙にかかる可能性
妹に比べれば当然見劣りするものの少女は美しかった

風に靡く白髪など作り物のように思えるほどだ
「へー、心配してくれるんだ。君は優しいね。でも、心配ご無用。私は戦闘は得意じゃないけど素人ってわけじゃないから面倒事はうまく避けてるの。慣れれば地獄だって都だからさ」
白い歯を見せて笑う姿はなるほど確かに図太く生きていけそうだ
そこでアカメはふと気付く
「そういえば名前を聞いてなかったな」
「そうだっけ？――――私はチェルシー。また合う事があったら仲良くしましょ」
それが帝国に仇なす敵との邂逅だったことをアカメは知ることはなかった
※　※　※
「あら、遅かったじゃない。デート？」
「ぶぶー、不正解。残念ながら相手がいないからさ。ちょっと、お友達とお茶してたの」
女はひどく真剣な表情でチェルシーの顔を覗く
「――――そのお友達は女の子かしら？」
「そんなことどうでもいいじゃん」
「よくないわよ。重要なことよ。チェルシーが目覚めくれたならこれ以上嬉しいことはないわ。今夜はお赤飯にしましょうか？」

僻々とした様子のチェルシーに気付かず女は一人盛り上がる
こうなったら暫くトリップして帰ってこないのでチェルシーに手頃なソファーに寝転がり棒付きの飴を口の中で転がす
聞いてないとは思うが一応形だけ報告しておくことにした
「皇帝の暗殺自体は簡単なんだけど、大臣は無理。あれで以外と警戒心強くてさ。私が殺せる範囲まで入れてくれないし護衛の羅刹四鬼が目を光らせてるからね。それに皇帝を殺した後、私が無事じゃ済まない」
「それくらい自力でなんとかしていただきたいものですけど引き続き潜入をお願いしますわチェルシー」
「なんで先輩に上から目線なのかなー？」
「私(わたくし)が誰に対しても不遜なことはご存知でしょう？」
「あ、後が怖いから止めましょうよライラちゃん」
「はッ、私はチェルシーよりクビョウの方が怖いですわ」
「おやおや？そんなこといっていいのかなー？私に泣き顔見せてたのはどこのお嬢様だったかなー？」
「それは私がオールベルグに入って間もない頃のことですのよ！」
四人の死神オールベルグ(傭兵)は明るく笑う

傍から見ればそれは異質な光景だった
彼女等は築かれた死体の山に腰掛け、返り血が飛んだソファーに寝転がり、まだ新しい死体を蹴飛ばし、笑っているのだから

就職を斬る！

「どうしてこうなった……」

少年タツミはあまりの展開についていくことが叶わず呆然と立ち尽くすことしか出来なかった

※　※　※

タツミは村を救うため仲間のサヨとイエヤスと意気揚々と村を出た

その後、ついてないことに夜盗に襲われ散り散りになった

一人になったタツミは危険種を狩りながら帝都に付く

腕を見せようと兵舎で剣を抜いたら追い出された

ついてない

てっとり早く仕官できる方法を知っているという酒飲みの女に騙されて金を殆ど持っていかれた

メシ代を払ったら一文無しになった

実は自分は不運なんじゃないかと思ってきた

金が尽きたので野宿しようとしたら富裕層のお嬢様アリアに拾われた

その一家は親切で行方知れずのサヨとイエヤスまで探してくれるという
最後についてると思ったら恩人の一家が殺し屋集団（ナイトレイド）の襲撃に会った
ついてないにもほどがあるとタツミは己の不運を恨む
護衛があっさりと始末されるのをタツミは見ていた
ナイトレイドに敵わないことを理解した
しかし、正義感の強いタツミは恩人のアリアを見捨てて逃げるなんて選択は出来なかった
アリアと護衛を見つけた
護衛は倉庫に逃げるまでの時間稼ぎをタツミに頼むがナイトレイドはタツミを無視し護衛を殺した
標的ではないから見逃すという
アリアが殺されるのを黙って見ていろという
それは無理な相談だとタツミは剣を抜く
相手の眼鏡のが自分より格上で勝てる相手ではないとわかっていても
（そもそも、女の子一人救えない奴が村を救える訳がない!!）
タツミは駆ける
眼鏡の女も駆ける

剣と鋏が交差し火花が散る
タツミは鋏をいなし攻撃に移る
眼鏡の女は横薙ぎを姿勢を地面すれすれにまで低くして避ける
「ヤベッ」
がら空きになったタツミに振るわれる一閃
「カハ……ッ」
「タツミ!!」
アリアの悲痛な叫びが木霊する
眼鏡の女は倒れたタツミを見て首を傾げる
「……はて?この感触、鉄ではありませんし……木ですか?」
眼鏡の女はその場から動かず倒れているタツミに疑問を投げ掛ける
死んだふりはバレバレのようだ
「痛ってぇ……ッ!油断して近づいても来ねぇのかよ」
裂かれた懐から二つの物が落ちる
神様はタツミを助けてくれなかったようだ
村長がくれた木彫りは真っ二つに両断されていた
咄嗟にバックステップを踏んでいなかったら自分も木彫りのように上半身と下半身

が泣き別れしていたことを想像して背筋が凍りそうになる
「たくさん殺してますから。出血量からして先程のは浅すぎて致命傷にはならなかったでしょう」
「一体、どれだけの人を殺して……」
「すいません。仕事ですから」
眼鏡の女は鋏を振るう
剣を落としたタツミにそれを防ぐ手段はない
タツミの頭に死のビジョンが刻々と浮かぶ
「待った」
「はい？」
鋏の先端が鼻先を掠める
誰かが眼鏡の女を後ろから引っ張ってくれたおかげで一命をとりとめたらしい
自分を助けてくれた恩人の顔にタツミは見覚えがあった
「この少年には借りがあるんだ。返してやろうと思ってな」
「！アンタあの時のおっぱ……！」
「やっほー。美人のお姉さんだ。しかし、少年、運がない、いや、運がいいな。シェーレ相手にまだ生きてるなんて。……オールベルグ組なら今頃お陀仏だったろうけど」

なにやら不吉な事を言っているが相手が良かったのだけは確からしい
タツミは悪運だけ強いのかもしれない
「少年。お前、罪もない女の子を殺すなと言ったが」
巨乳のお姉さんはタツミから背を向け歩き出す
そこにあるのはアリアと護衛が逃げ込もうとしていた倉庫がある
倉庫の扉は厚くなるほど逃げ込めば安心できる
それを獣は一撃でいとも容易く蹴破る
「これを見てもそんなことが言えるかな?」
「な……、なんだよ……コレ……!」
倉庫の中は地獄だった
傷はないのに檻の中で衰弱し動かなくなった人間があった
逆さまに吊るされて肉を削がれた肉塊があった
檻の中に皮と骨だけの骸骨が呻いていた
台の上で腸を裂かれ内臓を剥きだしにされた死体があった
水槽の中で溺死した死体があった
全身をバラバラにされ標本のように飾られている死体があった
頭に穴を開けられて脳漿を掻き混ぜられた死体があった

試験管の中に浸けられた赤ん坊の死体があった
死体があった死体があった死体があった
見るも無残な死体の山だ
辛うじて生きている者も助からないと確信できてしまう
「これが帝都の闇だ」
タツミは帝都に向かう途中で商人に忠告を受けていながら、今、本当の意味で帝国の腐敗を知った
こんなことが罷り通る
そんなことがあっていいものか
タツミは頭の中がぐちゃぐちゃになりそうだった
そこに追い打ちをかけるように見つけてしまった
「……サヨ？」
一緒に村で暮らし一緒に村を出た仲間の姿を見つけた
足が一本足りない
全身痣だらけ
顔色が悪い
違う違う違う

こんな再会を望んでいたわけじゃない
理不尽じゃないか
サヨが何をしたというのか
絶望と憤怒がタツミを包む
「…タ…ツ…ミ……タツミだろ。オレだ……」
消え入るような掠れた声がタツミに届く
それはよく知っている声だった
「イエヤス!?」
「そ…その女が……サヨをいじめ殺しやがった……!」
再会の感動はなく悲観の涙を流しイエヤスは告げる
「し、仕方なかったの!本当は嫌だったけど、やらなきゃパパとママに捨てられちゃうから仕方なくなってたの!心が痛かったけど、身寄りをなくした子が帝都でどういう末路を辿るかアリアは知ってた!怖かった!だから!」
イエヤスの証言にアリアは取り乱して見苦しく助けを請う
「まだ言い訳を続けるなんて大した面の皮だ。シェーレ悪かったな」
「問題ありません」
ゴーサインを受けたシェーレは鋏を構え直す

「待て」
「まさか……今の話を信じたわけじゃないだろうな少年？」
「いや」
今の話が本当だろうが嘘だろうが関係ない
嘘なら外道
本当なら自分の命可愛さに人間を棄てた外道
「俺が斬る」
「あ？」
結論は変わらない
憎しみに身を任せタツミは人の皮を被った化物を斬り捨てた
こんなことしてもサヨは生き返らない
しかし腹の虫が収まらなかった
アリアが言ってたことだ
「仕方ない、だろ？」
タツミは剣を収めた
シェーレは何も言わない
レオーネは静かに感心する

イエヤスは座り込んで笑う
笑って血を吐いた
駆け寄ったタツミにイエヤスは笑ってカッコよく最期を遂げた
死因はルボラ症の末期だという
「……どうなってんだよ帝都は……！」
※　※　※
嘆いていたらタツミはナイトレイドに勧誘された
勧誘というより拉致がしっくりくる表現だろう
暴れるタツミはお姫様抱っこで運ばれ、集合場所で落とされ殺し屋集団（ナイトレイド）の注目を一身に浴びながら言われた
「今日から君も私達の仲間だ！ナイトレイドに就職おめでとう！」
どうしてそうなった
タツミの頭はとっくに容量オーバーを起こしていた
取り合えずサヨとイエヤスの墓を作ろう
後の事はそれから考えよう
タツミは現実から目を逸らした

模擬戦を斬る！

暗殺部隊の朝は早い

「……えちゃん。お姉ちゃん朝だよ」

いつも一緒に寝ているクロメに起こされてアカメの一日が始まる

その際、クロメの頬が紅潮させてアカメに覆いかぶさっているが可愛いから気にしない

クロメは起こす前に着替えているのでアカメが着替え終わるのをじっと待っている

クロメは瞬きをせず刹那たりとも視線を外さないがアカメは気にしない

暗殺部隊は（殆ど）鍛錬を欠かさない

投薬していない暗殺部隊は脅威は低く朝練ではいつもアカメが一人無双するお約束である

投薬していてもアカメの一人勝ちなのは経験の差だとアカメは言う

カイリ以下男子勢は懲りずにアカメにボディータッチを試みてはクロメ以下女子勢にお話し（物理）を受ける

朝の運動で空腹感を得たアカメは朝食を沢山食べる
クロメも負けずに沢山食べる
暗殺部隊は見ているだけで胸焼けを起こす
暗殺部隊の女子が残したご飯もアカメとクロメが処分する
男子は頑張って食べる
朝の献立はエビルバードの親子丼だ
アカメとクロメは食べた分の運動をこなすために山もしくは川に向かう
危険種が一杯だ
鍛錬のついでに昼食も確保できる
ただ狩りすぎて絶滅しかけたことがあるので加減が大事だ
今日はマグロの気分なので川でどちらが多くマグロを確保するかクロメと競争した
僅差でアカメが勝った
殺気を殺すのはアカメの方が得意だ
マグロは生で良し焼いて良し
食事中が至福である
暗殺部隊は昼間に仕事が少なく割と自由に生きている
ただ日に日に人数が減っていく

いつまで経っても仲間が消えていくのは慣れない
アカメよりマグロ狩りが上手かったクイオはもういない
拠点に戻ると日が落ちかけている
仕事がなければ街をぶらぶらするかクロメと昼寝をする
仕事ならきっちりこなす
夜は料理好きの仲間が作ってくれる
色々な試作品を試したい仲間と美味しいご飯が食べたいアカメとクロメ
日々、仲間の腕が上達していく
もう一人立ちして店を出せるくらいだと判子を押す
女子勢の水浴びの時間
男達は楽園を目指し戦地へ向かう
迎え撃つ女は一切容赦がない
水浴びのついでに鍛錬というには両者、余りにも本気すぎる
殆ど実践だが最後の砦クロメの骸人形を突破する猛者は未だ現れない
帝具を使用している間、クロメは脱力してアカメに寄り添う
その姿を見てガッツポーズを取る仲間もいれば早くなんとかしないと、と余計な世話を焼こうとする者もいる

皆が楽しい仲間であることに違いない
「アカメっち、クロメっちに気を付けろよ」
「油断するな」
「いつか食べられるよ。というか食べられてないよね？」
就寝前になるとカイリや暗殺部隊の皆が酷く真剣に警告してくる
なんのことかアカメにはさっぱりわからない
警告していく仲間を見るクロメの目が据わっているがそれも可愛い
どんなクロメもアカメは愛おしくて仕方ない
「おやすみクロメ」
「うん。大好きだよお姉ちゃん」
同じ布団で眠る
アカメの一日はおおよそこの繰り返しである
※　※　※
その日はいつもと違った
その日でいつもが終わった
「……静か過ぎる」
「皆まだ寝てるのかな？」

広間からいつもなら早く起きている仲間が鍛練を始めている
今日はその騒音が一切聞こえてこない
アカメの足が無意識に早歩きになる
クロメは心配性だなと呑気に笑いながらアカメを追う
アカメの勘が良くも悪くもよく当たることをクロメは本人より知っている筈なのに
「よぉ、遅かったじゃねぇか！」
闇より用心を殺す最強の暗殺部隊
その精鋭達はアカメとクロメを残し死んだとはいえ暗殺部隊は帝都の警備兵如きに遅れを取るような柔な集団ではない
その暗殺部隊が集っていた広間はたった三人の男に蹂躙されていた
暗殺部隊を相手にその男達は無傷で呼吸も乱れていなかった
「あ、僕あのお姉さんの顔剥ぎたいなー」
「殺しは許可されていない抑えろよダイダラ、ミャウ」
「ちぇ、少しくらいいいじゃんリヴァのケチ」
「殺さないように加減して戦うのもいい経験値稼ぎになるぜぇ！」
リーダー格の男から仲間が殺されていないことがわかった
確かに全員倒れているが身動ぎしていたり呻き声が聞こえるところ命に別状はない

と思われる
そんなことよりダイダラ、ミャウ、リヴァ
アカメはその三人の名前に聞き覚えがあった
「エスデス軍の三獣士が何の用だ」
「知っていたか。紹介の手間が省けて助かるなアカメ、クロメ」
三獣士が笑う
好戦的な笑い方だ
三獣士は全員が帝具使いと聞く
帝具使い同士の戦いになればどちらかが死ぬ
三獣士を殺せても三獣士の上司のエスデスには敵わない
アカメの体に緊張が走る
それはクロメも同じようで頬には汗が伝っていた
「そう身構えるな。暗殺部隊の実力を図ってこいと主から命じられてな」
「使い物にならないようなら殺していいって言われてるからな頑張れよ！」
「そのときは僕のコレクションに加えてあげるから安心してね」
「帝具は使うなよ。互いに怪我で済まなくなる。特にお前が持っている『一斬必殺ムラサメ』はな」

アカメとクロメはリヴァから投げられた剣を受け取る
アカメの帝具『一斬必殺ムラサメ』は傷を付けた相手を殺す帝具
どんな掠り傷だろうと即座に呪詛が心臓にまわり死に追いやる
逃げる術は斬られた場所から呪いが心臓に届く前に傷口を削ぎ落とすくらいだろう
「殺し合いではないのか」
「同じ帝国の兵だ。殺し合って損害になりはしても得がない。だが、相手が帝具を所持していることを想定し戦え、模擬戦とはいえ死ぬことになるぞ」
「そういうこった。じゃあ、始めようぜぇ！」
ダイダラは開始の合図として斧をぶん投げる
帝具ではないがその斧は少女の体を分断にするには十分な威力と速度がある
この程度で死ぬならそこまで
当然、この程度を躱せない姉妹ではない
身を低くして飛来する斧を潜り抜けるアカメ
ミャウは斧の影から出てきたアカメに飛びかかる
が、ミャウより後から、しかし、高く跳ねていたクロメのかかと落としをまともに貰う
（ほう、速度だけならエスデス様に引けを取らんか）

リヴァは観戦し動かない
身軽ですばしっこいのが取柄のミャウに頑丈さは足りず、勢いよく地面に叩きつけら、その上に落下してきたクロメの足蹴で気を失った
それをダイダラは見ていた
アカメがクロメとミャウに一瞥もくれずダイダラに突っ込んでくるのを
それはダイダラの必勝形態
「経験値いただきだあああ!」
投擲した斧とは別に持っていた斧をアカメに振り下ろす
記憶力の悪いダイダラは模擬戦だということを忘れて殺す気の一撃を振り下ろしたのだ
その一撃をアカメは後ろに軽く下がり避けた
そうくるだろうとアカメには読めていた
「……あ?」
何故、アカメは生きていると呆然とした
ダイダラは本当に記憶力が悪かった
今、ダイダラが使っているのは、帝具『二挺大斧ベルヴァーク』ではなく変哲のないただの斧なのだ

ベルヴァークのように投げた斧が敵を追跡しないことを失念していた
仲間の失態にリヴァは顔を覆う
アカメはダイダラの惚けた顔に剣を叩きつける
鞘から抜いていないためただの打撃となったがダイダラを地に伏せさせるには事足りた
「こちらの準備運動は済んだ」
「二体一だけど文句言わないでね」
「文句など言わんよ。理不尽に嘆くようでは戦場で生き残ることは出来んからな」
ここからが本当の闘いだった
アカメとクロメ、リヴァは剣を抜き火花を散らす
姉妹を相手にリヴァは一歩も引かず応戦してみせた
模擬戦は姉妹が空腹の限界を迎えるまで続いた
※　※　※
暗殺部隊は痛む体に鞭打ち昼食の準備を始めた
姉妹が朝飯を抜いたのだ
空腹の獣が何を仕出かすかわかったものではない
自分達をボコった三獣士は全員痛い目を見たようだし溜飲は下がった

ミャウは背中がまだ痛むらしく寝転がっている
ダイダラはダメージこそ見えないが顔を赤く腫らしている
リヴァは致命傷こそ負っていないものの全身に掠り傷を刻まれていた
アカメとクロメも同様に裂傷を負っている
「ふ、悔しいが完敗だ。帝具戦なら死んでいた」
「帝具戦ならこうも簡単に二体一に持ち込めなかった」
「謙遜することはない。お前達、姉妹は強い。エスデス様の元に仕える資格があるというもの」
「……引き抜きか」
「その通りだ。私達と共に来いアカメ」
使い物にならなくなれば処分される暗殺部隊から帝国最強のエスデス軍への引き抜き
かなりの出世だ
聞いていた仲間達は我がことのように喜ぶ
だがアカメは素直に喜べない
「……」
「お姉ちゃんどうしたの？」

押し黙る姉の顔を覗き込むクロメ
アカメはそんな妹を愛おし気に見返す
喜べない理由
それは
「リヴァ。引き抜きは私だけか？」
「そうだ。クロメまで取ってしまったら暗殺部隊は機能すまい」
リヴァはアカメを指名した
姉妹ではなくアカメを
三獣士が引き抜きに来たのはあくまでアカメ一人だということ
クロメと離れ離れになる
それはアカメにとって好ましくない
「そんなの嫌だ！お姉ちゃんと死ぬまで一緒だもん！」
クロメも同様に姉が一人で遠くにいってしまう知るや否やアカメの体に強く抱き付く
加減なく全力で抱き付くものだからアカメの体が軋んでいるがクロメは気付かない
「悪いが拒否権はない。既に責任者に話は通しているのでな」
「だろうな」

アカメの中で諦観と拒絶が鬩ぎ合う
帝国に逆らえば無事では済まないという理性と最愛の妹から離れたくないという欲望がアカメを苛む
そんな姉妹の様子を見てダイダラは何気なく爆弾を投下する
「別に姉妹連れて行けばいいじゃねぇか。ちまちま暗殺するのは雑魚ばっかだろ」
「上等だ逝くぞオラァ！」
「やってやんです！」
「表出ろぉ！もう表だったわ！」
暗殺部隊と三獣士（ダイダラ個人）が第二ラウンドに突入し、ダイダラの蹂躙を尻目に姉妹は昼食を貪り食う
姉妹の旺盛な食欲にミャウは引き気味だがそんなことを気にする姉妹ではない
カイリはこれだけ元気なんだ姉妹が暗殺部隊を抜けてもやっていけるさと遠い目をしていたが食事を止める姉妹ではない
カイリはダイダラの拳に沈んだ
結局のところアカメとクロメ揃ってエスデス軍配属されることで話は纏まった
そういえば、とリヴァは思い出したようにアカメに問う
「――――暗殺部隊には一般人に毛が生えた程度の人間もいるのか？あれでは暗殺など

とても出来まい」
リヴァは疑問に思った
訓練を受けた暗殺部隊にしては弱すぎるのが混ざっていた
あれは一般人に毛が生えた
否、一般人そのものだ
「……そうでもないさ。そのための投薬だ」
「なるほど、そういうことにしておこう」
アカメの顔に翳りが落ちた
その表情からリヴァは気付いた
暗殺部隊が皆同じような仮面を被って顔を隠している理由
暗殺部隊に無関係の人間が数人紛れ込んでいる
何らかの理由で匿っているといったところだとリヴァは推測する
暗殺する対象に情けでも沸いたか
リヴァは確たる証拠もなしに踏みいるべきではないと判断し見逃すことにした
アカメとクロメは敵に回すとかなりの脅威になりかねない
味方に出来たのは僥倖
藪蛇を突くのは愚行でしかない

首斬りを斬る！（前編）

夜の帝都で女は彼とデートしていたはずだった
それなのに彼は死に彼を殺した男に首を掴まれ持ち上げられている
こんな理不尽な目に合わねばならぬのか
死の恐怖と己の不運に涙を流す
死にたくない一心で女は乞う
「お願い助けて！なんでもするぅ！」
「ほんと？俺お喋りだけど話し相手になってくれる？」
「うん！なる！なるから！」
だから助けてと言おうとして、言葉が続かなかった
「首と胴が離れるってどんな気分？ちょっぴり切ない？」
「……え……？」
女が気付いたときには胴体は崩れ落ちていた
男は死んだ女の表情を堪能し手に持った首を投げ捨てる
「んーっ、愉快愉快」

男は口元を三日月に歪めて嗤う
「やめられないな♡」
※　※　※
暗殺部隊から引き抜かれエスデス軍に配属されたアカメとクロメを待っていたのは『これより北方異民族の制圧へ向かう。私達が帰還するまで英気を養っておけ』というリヴァの書置きだった
異動して早々に仕事も教えられずに放置された
エスデス将軍とはいえ北方異民族の制圧に一年はかかると言われており実質一年の休暇を与えられたアカメとクロメは立ち尽くしクロメのお菓子を貪る音だけが虚しく木霊した
アカメは人を斬るのが趣味というわけではないので素直に喜ぶことにした
無駄な殺生は望むところではない
妹との鍛練は忘れない
クロメは退屈だと嘆いた
日夜、処刑や拷問で殺された死体を人形のように組み替えて遊んでいる
姉との鍛練は忘れない
せめて妹の悪趣味をどうにか出来ないかとアカメは大いに頭を悩ませる

姉に悪い虫が付かないようクロメは目を光らせている
宮殿に移ってからよくチェルシーに会うようになった
飴をよくくれるいい友人だ
餌付けされてると言うことなかれ
クロメは物陰からジーッとチェルシーを観察している
当然、クロメの視線に気付いているチェルシーだが触れるべきか放っておくべきか冷や汗を流している
どちらにしても嫌な予感しかしない
それとなく遠回しにクロメの視線についてアカメに聞くとアカメは妹自慢を始める
そしたらクロメは気分を良くして去ってくれるがアカメの妹自慢が終わる頃にはチェルシーの精根が尽きている
捨て身の策だねとチェルシーは乾いた笑いを漏らす
昼だったのに日が暮れてるやと遠い目になる
アカメは仕事をしないで大丈夫なのかと尋ねたところチェルシーは皇帝付きの侍女で割と仕事が少ないらしい
本当のところは皇帝付きの侍女である宮殿の侍女長が一人で殆どの仕事をこなすためチェルシーに仕事が残っていないだけの話である

そんなチェルシーの主な仕事といえば伝言役だ
アカメに大臣より招集がかかった
帝都を留守にしているエスデスの代わりにアカメとクロメに仕事があるとのことだ
国を腐らせている張本人の大臣と顔を合わせる
知らず知らずのうちにアカメが村雨を強く握っていたのをチェルシーは見逃さなかった
（アカメの帝具は厄介だしオールベルグの仇だけど……良い子だし――――なにようまくすれば利用できる）
友人（チェルシー）が毒となりアカメを蝕むことになるのはそう遠くないのかもしれない
※　※　※
「うむ、表を上げよ」
アカメは大臣に呼び出されたのに皇帝に謁見していた
普通は大臣の執務室とかに呼ばれるものではなかろうか
「ヌフフ、暗殺部隊の帝具使い。噂はこの耳まで届いておりますよ。裏切り者（ロクドウ将軍）の時はお世話になりましたな」
「……」
アカメが大臣を見た第一印象は豚が人の言葉を発しているという驚愕だった

失礼と思うか
だが、それだけ丸いのだ油がたっぷり乗っているのだ
実は太っているようで割りと筋肉質だがアカメの知るところではない
大体、皇帝の御前でハムを共食いしているとは何事だろう
皇帝も周りの文官も何も感じていないところあれが平常運転と見える
大臣は人の皮を被った豚ということで納得しておこう
「まずは憎っきナイトレイドに警備隊長のオーガが殺されたのを御存じですかな?」
「知っている」
アカメは敬語が苦手だ
というか敬語を使わない
不敬と切り捨てられかねないが敬語を使えないのだから仕方ないと開き直っている
馬鹿なのかふてぶてしいのか
おそらく両方だ
だから偉い人と会うときはカイリなどが出張る
アカメをお偉いさんに会わせるなとは暗殺部隊の暗黙の了解である
しかし、アカメの口調に大臣は気分を悪くした様子はない
「オーガが死んでからというもの帝都の治安は悪化する一方です。悲しさのあまり食べ

るハムが一枚増えてしまいます！」
治安を悪くしている元凶はお前だろう
とまでは流石のアカメも言わない
帝都警備隊隊長オーガ
その剣の腕は鬼と評され犯罪者から恐怖の対象とされていた
その一方で賄賂を受け取り犯罪に目を瞑る、無実の者に罪を擦り付けるなど権力を笠に好き放題していた屑
屑ではあるが犯罪者への抑止力になっていた
犯罪者であるオーガが死んでから犯罪者の活動が活発になったとは正義を成すナイトレイドにはさぞや皮肉なことだろう
「貴女には妹君と共に街の巡回してほしいのです。つまり、警備ですな」
「それだけか？」
「ええ、それだけです。しかし、近頃の帝都は物騒でして、殺し屋や首斬りが出没するそうです。なんでも帝具使いらしいですよ。出来ればこれ等の討伐してほしいところですね」
「了解した」
大臣からの依頼はナイトレイド及び首斬りの討伐

あわよくばその帝具の回収

「期待しておるぞ！」

何も知らない操り人形（皇帝）の激励にアカメは頭を下げた

幼くとも皇帝

カリスマ性に溢れている

それを腐らせている原因は悪逆非道の大臣を無条件に信頼している愚昧さ

皇帝の威光は二度と輝きを得ることはあるまい

※　※　※

タツミはナイトレイドに入って以来、結構な数度である命の危機に瀕していた

標的『首斬りザンク』を探し出して倒そうと夜の帝都を巡回する帝都警備隊に見つからないようにシェーレと担当した区画を練り歩いた

休憩中に用を足そうと一人になったところを狙ったようなタイミングで死んだはずのサヨが現れた

何故か逃げるサヨを追って追って追い付いて抱き締めたところサヨは怪しいおっさんになってしまった

正体は標的のザンクだった

帝具『五視万能スペクテッド』の能力一つ『洞視』により思考を読まれ圧倒された

ザンクはタツミを敢えて殺さず弄び命乞いをしろと抜かした
全てを懸けた一撃でザンクに一矢報いた
ザンクは予測を超えた斬撃とタツミの悪態に憤り勝負を着けようとした
そこに鋏の一閃が走った
「探しましたよタツミ」
援軍だ
エクスタスを見たザンクは愉快愉快と口元を釣り上げコートを脱ぎ捨てる
倒れるタツミを見てシェーレの雰囲気から隙が消えた
（『透視』！結果。内腿に包丁を所持している。よく注意しなくちゃな）
「気に付けろシェーレ。あの目で心を覗いてくるぞ」
「そうですか。なら……」
ザンクとシェーレが激突する
帝具使い同士の殺し合いが幕を上げた
シェーレの持つ鋏の形をした帝具『万物両断エクスタス』
この世に両断出来ぬもののない切れ味はザンクに防御を許さない
エクスタスの刃を受けないように回避に専念する
その上、心を読まれると知ったシェーレは無心になり体に染みついた技術でザンクと

渡り合っていた
「凄いな！『未来視』がなければ今頃真っ二つになっているところだ！」
ザンクはスペクテッド筋肉の機微でシェーレの次の行動が視えている
「……」
シェーレは何も考えずに鋏を振るう
一見して実力は拮抗しているように見えるがシェーレは掠り傷が増えていく
だがザンクとて無傷ではない
武器で防御すれば武器ごと腕を切り落とされる
回避はザンクの体力を容赦なく削り疲労はザンクの動きを鈍らせる
一方、シェーレに呼吸の乱れはなくザンクに確実に届こうとしている
証拠にザンクの首筋に血が伝っている
首斬りが首を斬られそうになったのだ
無心になっているシェーレの動きには癖があるがザンクは戦士ではなく処刑人
見切られる前にザンクは死ぬ
「愉快愉快♪このままじゃジリ貧だ。だから――――状況を変えるとしよう！」
スペクテッドの能力一つ『幻視』
その者にとって一番大切な者が目の前に浮かび上げる

タツミが死んだサヨに見えたのはザンクが見せた幻影だったのだ
対象は一人だが催眠効果は絶大
自分が何より大切だと言う自己愛者には自分自身が見える
自分が二人など幻覚と簡単に分かる状態であっても幻影こそが『自分』であると思い込まされ気味悪がって自害するほどの効力
抗うことは出来ない
「どんな手練れでも最愛の者を手にかけることなど不可能！」
――――だが、シェーレは止まらなかった
エクスタスはザンクの首を捉える
『未来視』で視ていたザンクは不格好だが後ろに転ぶことで間一髪死を免れた
追撃が来なかった幻視が全く効いていなかったわけではないらしい
「コイツ……容赦なく……」
「……あっ、すいませんマイン。うっかり斬ってしまいました」
この発言にザンクとタツミも思わず思考を放棄した
数秒の沈黙を破ったのはザンク
お喋りは趣味だがこれは言わずにはいられない
幻影が解けようが言わないわけにはいかない

「うっかりで大切な者を殺しかける暗殺者がいるかあああ！」
「鋏（エクスタス）！」
マインの幻影を殺しかけたのはシェーレの天然だが、偶然生まれたザンクの大きな隙をすかさず利用するシェーレの逞しさには脱帽するしかあるまい
アドリブで状況を打破するのはシェーレの強みで十八番だ
「しまった……ッ！」
目潰しをまともに食らったザンクは腕を交差する
だが、あの鋏は防御事両断する
ザンクは片腕を持っていかれる覚悟をした
「……？」
いつまでたっても痛みが襲ってこない
ザンクはおそるおそる目を開く
そこにはナイトレイドの二人の姿がなくなっていた
地面には血痕がザンクから離れるように続いている
逃げられたと悟ったザンクは肩を震わせる
ナイトレイドは鬼ごっこをご所望らしい
「愉快愉快♪」

首斬りを斬る！（後編）

シェーレはタツミを抱えたまま、路地裏を駆け、ときに屋根から屋根へ飛び移り逃げていた
タツミは痛む傷を押さえながらシェーレに噛みつく
「なんで逃げるんだよシェーレ！あの場面、絶好のチャンスだったじゃねぇか！」
「……タツミは気付きませんか？」
「何にだよ？」
「血痕が残っているにも関わらずザンクが私達を追ってこないことです」
タツミはハッとして後ろを振り返る
そこにはザンクに斬られた傷からタツミの血が零れている
これではどうぞ追ってくれというようなものだ
それなのにザンクの姿は見えない
追ってきている気配もない
「ザンクが頑張っているうちに手当してあげますね」
「は？」

タツミにはシェーレの言葉の意味が分からなかった
シェーレはうっかりしていて視野が狭いようで広い
ザンクが隙を見せたとき戦いに乱入者が現れようとしたのにシェーレだけが気付いた
こちらの顔を向こうに見られる前に鋏（エクスタス）を使って逃走した
自分は手遅れだったかもしれないが倒れていたタツミの顔は隠し通せた
帝国の帝具使いアカメ
連戦で彼女と交戦するのは好ましくない
帝国側としてもザンクは捨て置けないはず
標的と帝具を取られるのは痛いがザンクには囮になってもらった
血痕が帝都警備隊に気付かれる前にマインに合流しタツミの手当をしてアジトに戻るとしよう
ザンクは生きて朝を迎えれまい
「……ッ！」
何より、シェーレは一刻も早くマインの顔が見たかった
スペクテッドの『幻視』は強力無比
鋏（エクスタス）を使った瞬間、シェーレの視界に移っていたのは急速接近してくるアカメと血を流

すマインの姿だった
催眠が解けた今でも大切な仲間を傷付けてしまった光景が網膜に染みついて離れない
マインの姿をしたザンクにトドメを刺すなど出来る精神状態ではなかった
無事なマインの駄目出しを聞いて安心したい
自分は仲間を傷付けてなどいないのだと確証が欲しい
シェーレは足を速めた
※　※　※
ザンクはナイトレイドとの鬼ごっこを中止した
背後から新しい客が来たことに気付いたからだ
その身に纏う殺気はナイトレイドの女よりどす黒い
「愉快愉快♪こっちの方が美味しそうだ！」
「その目の帝具。お前がザンクだな」
ザンクの傷が新しい
アカメはザンクが既に何者かと交戦した後であることを知る
ここに辿り着く前に眩い閃光があった
手練れに違いないが不利を悟り逃げたとアカメは予測する

「噂の暗殺部隊のアカメに知って貰えてるなんて嬉しいねぇ」
「……」
「何故、知っている……と考えたろ？」
「……その帝具、心を読むのか」
「ピンポーン！正解の褒美に」
「葬る」
「おっと！お喋りもしてくれないなんて悲しいねぇ！」
ザンクはアカメの不意打ちを軽く受け流す
心を読めるザンクにはそれが不意打ちのつもりがないのが分かる
アカメは初撃が受けられるのは予測済み
初撃を放った時点で思考が追撃にシフトしている
しかもザンクに心が読まれていること前提で攻撃している
「愉快愉快♪強いなアカメ！」
心を読まれた状態で互角
アカメは心を無にする
しかし攻撃の精度は損なわれない
「ほう、暗殺者ってのはどいつもこいつも無心になれるのか!?」

筋肉の機微でアカメの次の行動が手に取るように分かるザンクには意味のないことだ
ザンクは掠り傷すら致命傷となる村雨に、防御を許さないエクスタスと違ったやりにくさを感じる
しかし、自分の有利を信じて疑わない
剣を何度も何度も振るい火花を散らし漸くザンクがアカメに一太刀入れたところで大きく後退する
一撃を貰ったアカメが無心を解いたところ自分とお喋りしてくれるのかとザンクは嗤う
ザンクはアカメに聞いてみたいことがあったのだ
アカメを知ったのは偶然だ
辻斬りをしているとき獲物の一人がアカメのことを喋ってくれたのだ
ザンクはその話に興味を持って少し調べてみた
暗殺部隊のアカメ
帝国に仇名す者を影より始末する部隊
その殆どが薬と洗脳によって作られたつまらない連中だったがアカメだけは違った
アカメは正気で人を殺して殺して殺しまくっているのだ

アカメならばザンクは自分の抱える悩みを分かち合えると考えた
「なぁ、アカメ……、お前、声はどうしてる？」
「……声？」
「ホラ……黙ってると聞こえてくるコレだよ」
ザンクは、元は帝国最大の監獄で働く首斬り役人であった
毎日毎日、繰り返し繰り返し、命乞いする人間の首を斬り落としていたザンクには殺してきた人間達の声が聞こえるようになった
大臣のせいで処刑する数が膨大になり彼等の最期の言葉を、彼等の怨嗟を間近で何百何千と聞き続けたザンクは狂ってしまった
「地獄からの呻き声だ。俺を恨んで、早く地獄へ来いって言い続けている」
刑場で来る日も来る日も聞いてきた罪人達の最期の言葉が頭から離れなかった
精神を落ち着けるために薬を飲んでいた
それが悪かった
適切な使用量を守らず服用してきた薬は毒となり、ついに幻聴が聞こえるようになった
ザンクはそれを幻聴と思わなかった
否、思えないほどに追い詰められていた

だから、獄長を殺してスペクテッドを奪って逃げだした
けれど怨霊は彼を逃がしはなかった、許さなかった
日に日に怨嗟の声は酷くなる
死にたくないから首を斬るのだ
ザンクはこれからも自分の代わりを地獄に送り続ける
「俺は喋って誤魔化してるが、お前はどう対処してる？」
アカメは無言だった
ザンクもアカメが何か言うのを静かに待つ
スペクテッドで心を読むなど無粋はしない
沈黙したザンクに呻き声は声高々に謳う
やがてアカメは口を開く
「私は彼等の憎しみを正当なものだと思う。無実の者も有罪の者も死にたくなかった筈だ。それを私達は無意味に殺戮した。だから、拒絶しない。だが、従ってやるつもりもない」
それがアカメの出した答えだ
スペクテッドを使っていないザンクにはアカメがザンクと同じように声が聞こえているかどうかの真偽は分からない

重要なのは真偽ではなくアカメの出した答えなのだから
「……なんと、この声を受け入れてるのか。強いねぇ！」
「！」
アカメとなら、この苦痛を分かち合えると思ったが違う
アカメは強い
肉体的にも精神的にも
全力で相手をしないと失礼というものだ
スペクテットの目を開く
幾等強いといってもこれは敗れまい
ザンクは口元を弧にする
アカメの前に最愛が幻影として現れた
「クロメ……？」
どういうことだ
今、自分はザンクと戦っていたはずだ
ザンクはどこに消えた
幻影のクロメが八房を抜く
それを見てもアカメは村雨を抜けない

「愛しき者の幻影を見ながら死ね！アカメ!!」
アカメはクロメ以外なら自分でも斬れた
最愛（クロメ）だけは斬れない
アカメ自身が死ぬことになろうともだ
ザンクは両腕の剣でアカメの首を刎ねようと接近する
まさにアカメの首に剣が食い込んだ
その瞬間だった
「――――何をしてるの」
寒気
アカメの背後に何かがいる
否、背後には誰もいない
なのに度し難い恐怖があった
ザンクは恐怖に抗うことなくバックステップをいれる
次いできたのは痛み
肩を斬られた
痛みも感じるより早く血の気が引いた
下がっていなければ首を斬られていたからだ

「誰だ!?気配がなかったぞ!」
気配がないのは当然だ
ザンクは遠視で漸くそれを見つけた
ザンクの肩を抉ったのは臣具『トリシュラ』
帝具に及ばないが高い性能を持つ臣具
トリシュラは際限ない伸縮機能を持つ
欠陥としては伸縮させた分だけ重量が増し小回りが利かないこと
その臣具の使い手をアカメは知っている
トリシュラは、今は亡きかつての仲間ナタラの臣具だ
アカメの心を読むことでザンクも知った
トリシュラの上を軽快に駆けて二人の間に参上したその女は
「クロメ」
「うん、私だよ。大丈夫お姉ちゃん?怪我してるよ?あっ、そっかー!……あいつが私のお姉ちゃんに手を出したんだ?」
クロメの目は昏く淀んでいた
クロメの眼光に貫かれたザンクは無言で後退る
クロメは既に日本刀型の帝具『死者行軍八房』を起動している

八房はその刃で葬った相手の死体を操る帝具
地面が盛り上がりクロメに殺された骸人形が起立する
「ロクドウ。ドーヤ。そいつ殺して」
骸人形は何も言わず忠実にクロメに従う
死体なのだから思考などしない
表情も変わらない
故に洞視は意味を成さない
片方の肩は抉られて使い物にならない
幻視はアカメに使っている
こんな状態で限界のない骸人形と戦っても勝機はない
「ぐ……っ！まだだ！」
ザンクは突破口を探すためにクロメの心を読んだ
深く読んでしまった
『お姉ちゃん

お姉ちゃんお姉ちゃんお姉ちゃんお姉ちゃんお姉ちゃんお姉ちゃんお姉ちゃんお姉ちゃんオネエチャンオネエチャンオネエチャンオネエチャンオネエチャンオネエチャンオネエチャンオネエチャンオネエチャンオネエチャンオネエチャンオネエチャンオネエチャンオネエチャンオネエチャンオネエチャンオネエチャンオネエチ』

「う、うおおおああ!?なんだお前!?何故、そんな狂ってるんだ!?」

余りの悍ましさにザンクは洞視を解いた

クロメの心はアカメ一色で染まっていた

歪み過ぎて歪みが無い

怨嗟の声より恐ろしい

あんなものを抱えて生きれるわけがない

ザンクはクロメが恐ろしくて仕方ない

クロメはアカメの目を後ろから抱き付くように手を添えて覆っている

単純だが幻視を破るには十分効果的な手だ

しかし、ザンクの目にはクロメがアカメを捕食しようとしているように映った

「何を言ってるの?私はただお姉ちゃんが大好きなだけ」

突破口を開くためにクロメの心を読んだというのにそれが返って大きな隙となった

ロクドウの鞭は音を裂きザンクの足を砕いた

ドーヤの銃弾はザンクの腹に穴を開けた
骸人形はそれだけでは止まらない
「ぬうあああ!!死んでたまるかあああ!!」
ザンクは命掛けで力を振り絞る
ロクドウの鞭を裁き剣が折れ、ドーヤの銃弾を役に立たなくなった腕を捨てて防御する
決死の攻防にクロメは怒りを忘れて感嘆する
だが、それだけだ
ドーヤに撃たれた傷口から留めなく血が流れる
血を失い過ぎた
ザンクの意識が遠のく
足元が覚束ない
視界が霞む
最期に映る景色はやけに地面が近かった
「ねえ、首と胴が離れるってどんな気分?」

帝都警備隊を斬る！（前半）

首斬りザンクは帝都警備隊に始末された
と、表向きではそう報じられた
実際はエスデス軍のアカメとクロメに討伐されたのだが、日夜街を走り回り犠牲を出しながら街を守っていた警備隊に花を持たせてやろうという粋な計らいだ
と、大臣は嘯くが真相は定かではない
それよりアカメは大臣が脇に抱えている大きな焼き豚が気になっていた
どこまでも食欲旺盛な女であった
「首斬り魔の討伐、実にお見事ですぞ」
「うむ、これで一安心だな！」
「いえ、陛下。まだ帝都には帝都警備隊長や私の縁者を殺した賊が帝都に潜伏しております。これでは安心して食が進められません」
（なら、代わりに私が食べてやろう？）
アカメの無言の訴えに気付いたのか焼き豚を抱え込む大臣
器の小さい男だと内心で舌を打つ

「コホン、アカメ殿には賊を狩り出し始末するためエスデス将軍を呼び戻してもらいたいのです」
「……北の異民族制圧はもういいのか？」
「ええ、問題ありません。エスデス将軍は北の制圧を完了していますから」
エスデスが帰還するればいよいよアカメとクロメはエスデス軍として仕事を与えられるだろう
ナイトレイド狩りは近い
それはそうと大臣の肉を見ていたら腹が減ったので肉を食べようと思ったアカメだった
※　※　※
タツミは夢を見た
とても切ない夢だ
直後に天然上司で切なさが緩和された
シェーレはアジトで役割がなくタツミを集中して鍛えてくれた
暗殺者養成カリキュラムに記された鍛錬法を片っ端からこなしていった
ザンクの帝具は凄まじくあれだけの性能があるのだ
サヨとイエヤスを生き返らせる帝具があるかもしれない

希望というには余りにも危うい
それをブラートが殴って否定して埋めなければタツミの心に大きな隙が出来た
（分かってる。死んだ人間は生き返らねぇ……）
未知の帝具に希望を抱いた分、反動は大きかった
もう一度、二人を失ってしまったように感じた
本当にお別れなのだと二人の墓の前で泣いた
泣くタツミをシェーレは優しく抱き込んだ
「皆には内緒にしてあげますから今は好きなだけ泣いていいですよ」
「……ありがとうシェーレ」
湿っぽい空気が流れる
このまま終わればいい話
このまま終わらないのがナイトレイド
この雰囲気をぶち壊す
「ダラッシャアアアア！」
「マ、マイン!?」
野生のマインが茂みから飛び出してきた
マインの不意打ち

タツミはシェーレの膝から落ちた
「このケダモノ新人がッ！シェーレが天然お馬鹿なことをいいことにナニするつもりだったか私に言ってみなさいッ！撃ち殺す！」
「はあああ!?そんなつもりねぇし！何勘違いしてるんだよマイン！」
言いがかりだ
濡れ衣だ
無実を主張するタツミだが、聞く耳持たぬマインは処刑を開始する
裁判は二秒で終わる
ギルティだ
置いてけぼりのシェーレはポカーンと事態の行く末を見守ることしかできない
「嫉妬するマインは可愛いと思わない？大好きなシェーレを童貞に取られると思ったのかしら？」
「覗き見なんて悪趣味ですわ頭領。堂々と見るべきですのよ？」
「泣きたいなら俺が胸を貸してやるぞタツミ！」
「うわあああ!?皆いたのかよ！」
茂みから拳を強く握ったオールベルグ頭領シナズが顔を出していた
タツミには変な人という印象しかない

ライラはマインと同じく威圧的でお嬢様だ
堂々と姿を見せたライラと兄貴は覗き見をしていたわけではなさそうだがどいつもこいつもタツミの泣き顔を目撃したのだ
というか兄貴の胸を借りるのは身の危険を感じる
「安心しなさい。童貞の泣き顔なんて毛ほども興味はないから」
「辛辣！」
シナズのフォローはタツミの繊細な心を抉ったが、知ったことかとシナズは吐き捨てる
優しくしてほしいなら美少女に生まれ変わって出直せ
そしたらベッドで慰めてやんよと無茶ぶり
その間もマインはタツミを足蹴していた
満足したマインは時間差のツッコミを入れるも
「別に嫉妬なんてしてないわよ！アンタ達と一緒にするな！」
ライラはマインを一瞥して肩を竦めヤレヤレと首を振ってから
「そういうことにしておきますの」
「ちょっと、パンプキン取ってくるからそこで待ってなさい」
青筋を立てたマインは全速力でアジトに戻っていった

シェーレは一人微笑む
『お前の頭のネジは外れている』と馬鹿にされ続けた
悲しかった
唯一無二の親友がいた
でも、彼女に二度と会うことはない
それだけのことをした
それだけがシェーレに出来ることであった
ナイトレイドにスカウトされて、やっと、シェーレは誰かの役に立つことが出来るようになった
ゴミを掃除して社会に貢献することが出来た
ナイトレイド
私の居場所
いつか報いを受けなければならないことをシェーレは理解している
それでもナイトレイドは心地良く楽しいと胸を張ってシェーレは誇る
一つとして誇るもののなかった自分はもういない
※　※　※
スラムはいい

肉が安い
沢山食べれる
何の肉を使っているかは分からないが食べれるのなら何の問題はありはしない
富裕層は肉の量が少なく無駄に高くていけない
アカメの食いっぷりに泣きながら勘弁してくれと懇願してくる脆弱な店ばかり
その点、スラムはアカメが肉をガンガン食べても怒らない
それどころか店主が挑戦的な笑みを浮かべて頼んでもいないのに肉の追加を持ってきてくれる
外野はアカメが店の肉の在庫を食い尽くせるか酒を飲みながら賭ける
活気がある
彼等の暮らしは裕福でもなければ恵まれてもいない
されど、悲観はなく、前向きで強かだ
こういう場所がアカメの肌に合う
「いたぞっ！レオーネだ!!」
「溜まったツケを払ってくれ！」
「博打で負けた金、清算しろ!!」
「兄貴からちょろまかした金返せゴラァ!!」

いい走りっぷりで、女が笑いながら借金取りに追いかけられているが逞しいことはいいことだ
ガイなど遊郭にいってはツケを踏み倒して逃げていたものだと懐古の念に駆られる
あの頃に戻れるなら……
「おやおや、アナタはアカメさんではないですか？」
「誰だ……？」
アカメが肉を食べる手を止めていると声を掛けられた
隣に敬礼する帝都警備隊の女が立っていた
野次馬というわけではないと思うが、しかし、記憶にない
「これは失礼しました！帝都警備隊セリュー・ユビキタス！正義の味方です！」
「ユビキタス……」
セリューという名前に聞き覚えはないがユビキタスの方には覚えがある
一卒の兵でありながら帝国の闇を暴こうと一人で奔走した正義漢の名だ
男は娘に恥じぬ正義（大人）であろうと帝国の闇を嗅ぎ回り、気付かれた
帝国は、大臣は、彼個人を驚異と認め暗殺部隊を派遣した
それがアカメだった
アカメは特に感じ入ることなく男を殺した

大臣は脅威というが上司は羽虫を踏み潰す程度の仕事としか考えなかったのだろう
アカメも個人で帝国を変えれるとは思わなかった
男は床に沈みながらもアカメに正義の心はないのかと問うた
アカメが答える前に男は村雨の呪詛が心臓に至り息を引き取った
その事実は曲げられ、ユビキタスは賊の凶刃に掛かり殉職したことにされた
セリュー・ユビキタスはその嘘を信じている
「はい！首斬り魔を倒したアカメさんにお会いできて光栄です！」
「……」
目前で、かつて自分が殺した男の娘が自分に尊敬の眼差しを向けている
それがアカメには複雑な気分だった
（私はお前に恨まれるべきなのにな）
セリューは父親の仇であるアカメに正義は何かと熱く語っている
物欲しげにアカメの肉を見つめる謎の白い生き物はセリューの帝具『魔獣変化ヘカトンケイル』だという
生物型の帝具は村雨の効果が効かないので要注意だ
正義を語り終えたセリューは汗を拭う
しかし、アカメは正義語りを殆ど聞いていなかった

そのしっぺ返しがくることになる
「……というわけで、アカメさん！共に悪を探しだして殲滅しましょう！」
「えっ」
セリューからのデート（パトロール）のお誘いに素っ頓狂な声が出る
目を輝かせる正義馬鹿はアカメの首根っこを掴む
抵抗するアカメは食事中だと必死にアピールする
セリューは二度三度頷き、
「確かに正義を執行するためにはエネルギー補充は大切です。しかし、食べ過ぎはよくないですよ。いざというとき動けなければ本末転倒です！」
聞く耳持ちやしない
ドナドナされる子牛のごとくアカメは引き摺られていく
肉がまだ残っているのにアカメの目尻に涙が見える
その日、セリュー・ユビキタスによって店主は初めてアカメから黒星を勝ち取った
まさかの番狂わせに野次馬が沸く
今日は祝宴だ
※　※　※
「チブルって標的。用心深いにも程があったわ……」

「ああいうのカラクリ屋敷っていうんですかね？」
「本当に用心深いなら暗殺者に標的にされるようなヘマなんてしないと思いますけど……」
クビョウはナイトレイドが苦手だった
暗殺者の癖に果敢で臆病さが足りない
ブラートほどの実力者ならそれも許されよう
しかし、スナイパーのマインとネジが抜けているシェーレが引き際を弁えていないのは問題だろう
この間、ザンクから逃げてきたのでシェーレは成長したのかもしれない
可能性は低いが希望がなくはない
頭領はクビョウを逃げ腰が過ぎると評するが決して責めているわけではない
臆病さの足りない暗殺者は未熟とクビョウに教えたのは他ならぬ頭領だ
その教えにクビョウは救われた
昔のオールベルグは知らないが、今のオールベルグでは勝てないと悟ったら逃げ帰ってもいいのだ
昔いたところは『逃亡は許さぬ。死んでも戦え』なんて無茶を要求してきた
だから、死ぬのだ

クビョウは臆病者だ
自分を怯えさせる脅威は排除する
それが上司であっても帝国の将軍であってもだ
ライラは言う
『クビョウは臆病ですけれど、攻撃的な臆病さですのよ？』
そんなことはないとクビョウは否定する
殺した方が安全だと思ったから殺すだけで生かしておいても脅威にならないなら素直に逃げるとも
戦った方が安全な事態など早々に起きない
その早々が訪れるなんて今日はなんて厄日だとクビョウは嘆く
「やっと、やっっっっと、巡り合えたなナイトレイド!!帝都警備隊、セリュー・ユビキタス！絶対正義の名の下に悪をここで断罪する!!」
クビョウはセリュー・ユビキタスがただの帝都警備隊ではないと感じ取った
おそらく帝具使い
一瞬でクビョウの思考は逃走を選択する
マインとシェーレがセリューに相対する中、一人だけ身を翻した
逃げようとした先に――――アカメがいた

先輩であるチェルシーからエスデス軍に新たに配属されたアカメとクロメの情報は齎されていた
しかし、実際に会ってその重圧を知った
何が利用出来るだ
導火線に火を付けたダイナマイトを抱きかかえるつもりかと文句を言いたい
まぁ、怖くてチェルシーの前では絶対に言わないのだが
「ナイトレイド、遭遇した以上は――――葬る」
ゾワッ……!
クビョウの全身に悪寒が駆け巡る
スイッチを切り替えたアカメは研ぎ澄まされた刃そのものであった
だが、クビョウはその雰囲気に呑まれ恐怖したのではない
アカメの持つ村雨の禍々しい殺意に、だ
あれは世界を呪う刀だ
あんなものが在るというだけで恐ろしい
故に、壊さなくては
クビョウは怯えながらアカメの、村雨の破壊に意識が向く
ライラはチェルシーよりクビョウの方が恐ろしいと評価した

それはクビョウが恐怖の余り、対象を手段を選ばず排除しようとするからだ
クビョウは逃げ道などない戦場に身を置いていたのだ
逃げることが不可能ならば殺す他、道はない
それが身に染み付いている
逃亡を許された今でもクビョウは臆病で臆病でオールベルグの中で一番、危険な戦士だ
「怖いから死んでください」
妄信する正義の為にセリューはナイトレイドを処刑する
敵対するなら標的でなくとも排除は止む無し、マインとシェーレは応戦する
顔が割れているクビョウはここでセリューと争う意味はない
けれど、精神の安静の為にクビョウはアカメを葬ろう
「――――我こそは死神オールベルグの恐怖
無情の畏
汝の骸を静寂の慰めにせん」

帝都警備隊を斬る！（後半）

警報の笛が夜の帝都を響き渡る
ナイトレイドは笛の音を聞き付けた帝都警備が駆け付ける前に逃げなければならなくなった
制限時間を設けられたがアカメとクビョウ、セリューとマインとシェーレは互いを観察し動かない
『オールベルグ』
アカメはその暗殺結社を知っていた
かつてアカメ達、暗殺部隊が敵対した革命軍に雇われた伝説の傭兵である
名の知れた暗殺集団だけあってアカメ達は無傷で勝つことが出来ず、多大な犠牲を払い辛くも勝利した
主戦力を失ったオールベルグの残党はアカメの知らないところで帝国に蹂躙され滅ぼされたと聞く
しかし、アカメが何より驚き、研ぎ澄ませた殺気を霧散させた理由はクビョウの持つ剣にあった

「それはチーフ（ナハシュ）の剣……」
クビョウの持つ剣
臣具『水竜の剣』はかつてアカメの部隊のリーダーをしていた男の使っていた剣であった
クビョウは水竜の剣を、偶然、拾っただけだがそれをアカメに教えてやる義理はない
先手必勝と突貫を掛ける
無論、正面から不意を突いた程度で倒せるほどアカメは安くない
村雨と水竜の剣が交差する
思考をクリアにしたアカメは余計な情報をシャットアウトする
オールベルグを殺してチーフの剣を取り戻そう
それがチーフへの手向けになる
アカメと対象的にクビョウの思考は恐怖でグチャグチャだ
クビョウの生存本能は激しく警鐘を鳴らしている
（死にたくない死にたくない死にたくない死にたくない死にたくない死にたくない死にたくない死にたくない死にたくない死にたくない死にたくない……！）
生にしがみ付くクビョウの執念
それがアカメの技量を凌駕する

なんて世界は甘くない
村雨の能力は傷一つから呪いを流し込み心臓に到達すれば相手は死ぬなどと反則もいいところな刀だ
だが、それを抜いてもアカメは強い
クビョウは生きた心地がしない
アカメは帝具の性能に頼り過ぎないように戦っている
それがクビョウには恐ろしくて仕方ない
村雨を持つアカメは相手に致命傷を負わせる必要はない
傷一つさえ付けれればそれで終わる
クビョウはアカメと幾度目か剣を交えて気付いてしまった
アカメの太刀筋はどれも致命傷しか狙っていない
（戦い方を切り替えられた瞬間に私は死ぬ……ッ！）
即死刀に頼る戦い方をメインにすればアカメは容易くクビョウを葬れる
その事実に行き着いたクビョウの思考が乱れ、息は荒くなる
されど、クビョウの太刀筋は絶対に揺るがない
状態は膠着していた
アカメは刀を振るいながら感嘆の息を漏らす

五分五分の戦いだと素人ならば判断するだろう剣と刀の奏でる舞
否、実際のところは実力は拮抗しておらず、技量も速度もアカメが上回っていた
だというのにクビョウはアカメに食いついてくる
クビョウは天才ではない
クビョウは優れた師を持っていない
クビョウは肉体を改造しているわけでもなく、薬物を投与しているわけでもない
ただ、死への拒絶が死神の鎌（アカメの一刀）を遠ざける
この劣勢を覆す術をクビョウは持っていながら使えずにいた
一方、アカメは着実にクビョウの戦い方を学習していく
クビョウの剣は荒々しい攻撃の型
だが、防御に回らざる負えない今はそれを十全に使えていない
圧倒的にアカメが優勢なのだが、クビョウに奥の手はあることをアカメは理解している
クビョウには身体能力を底上げする臣具、水竜の剣がある
仲間の使っていた剣だ
当然、能力発動時に激痛が走ることをアカメは知っていた
一瞬の隙も与えないことで強化を簡単に封印できる

攻撃に徹すればアカメがいずれ競り勝つのは必定
（油断せず、攻め切る！）
仕切り直しの為、アカメから距離を開けようとするがクビョウを追撃する
クビョウはアカメの前で水竜の剣の強化を使えるとは思っていない
クビョウはシェーレとマインの援護を待っていたが芳しくない
後、十手、剣を交わさないうちにクビョウは葬れる
だが、しかし、残念ながら、不幸なことに、――――セリューとアカメは互いに情報を共有していなかった
「コロ！狂化（おくのて）！」
『ギョアアアアアアアアアアアアアア!!!』
シェーレに追い詰められたセリューは苦肉の策として己の生物型帝具の奥の手（きょうか）を使用した
事前にアカメにコロの奥の手を伝えなかったのは使うとは思っていなかったというセリューの慢心だ
帝国の闇から目を逸らし、臭いものに蓋をして、正義は悪に屈しないなどと妄言を本気で宣（のたまう）うのがセリュー・ユビキタスという歪な少女なのだから
突然の咆哮にセリュー以外の行動が一瞬阻害される

それがクビョウにとって起死回生の一手となった
アカメの勝利は必定だったが、奇しくも味方であるセリューの帝具『魔獣変化ヘカトンケイル』の咆哮がそれを破る
プロであるアカメの立ち直りは早い
聴覚をシャットアウトするという離れ業でやってのけた
それでも十分な隙だ
クビョウは耳が馬鹿になることにも気を留めず強化を執行していた
「これで形勢逆転です」
「ふ……っ！」
クビョウの剣が重みを増し、鋭く激しくなった
アカメは攻撃を捨て防御に回る
クビョウは必敗の状況こそ脱したが、依然、アカメが有利だ
水竜の剣の強化は三分
耐えきればアカメの勝ち
耐えきられればクビョウの負け
時間制現による焦燥はクビョウの剣をより高みに押し上げた
秒事に成長するクビョウの剣技を冷静に対処し、アカメもまた、冷や汗を流す

クビョウは掠り傷すら許されない
されどクビョウの剣は攻撃一辺倒
だというのにアカメの反撃は許されない
攻撃に転じようものなら必殺の一撃がアカメを狩る
三分という短い時間が嫌に長く感じる
時間は一分も経ってはいない
「ああっ、ああああああ!!!」
ヘカトンケイルの腕に万力のように握り絞められるマインの悲鳴が広間を木霊する
クビョウは聞こえていながら見向きもしない
咆哮を諸に喰らい、耳が馬鹿になったのだから聞こえなくても不自然ではなかろう
アカメが下がった
それは仲間を助けに行かないのかという無言の訴えだ
アカメに追い縋ることがクビョウの訴えへの返答だ
マインを助けに行けば後ろから斬り殺される
誰がそんな悪手を取るというのだ
シェーレが帝具の使用者のセリューを殺せば解決する話だ
腕は粉々になるかもしれないが死ななければいいのだ

生きてさえすればなんの問題はない
しかし、マインの悲鳴が止んだ
「仲間はお前ほど冷静ではないようだ」
アカメとしては愚かしいが好ましい判断だと微笑む
「?まさか……っ！」
アカメに注意を払いながら視線をもう一つの戦いに移す
シェーレは敵に背を向けマインをヘカトンケイルの腕から助け出していた
「あの馬鹿……っ！」
敵に背を向けるというのがどういうことかも理解してないのか
案の定、セリューは正義など冗談のようなドス黒い嗤い顔をシェーレに向けていた
セリューは人体改造により口内から銃を撃つことが出来る
「正　義　執　行　!!」
セリューは無防備なシェーレの背後から銃撃し、トドメにヘカトンケイルは大口を開けてシェーレに飛びかかっていた
クビョウが恐れたのはシェーレの死ではない
シェーレが死に、腕が折られ使い物にならないマインが残れば、ヘカトンケイルはアカメに加勢する

自分だけは死にたくないクビョウは頭が熱を上げてオーバーヒートするまどに頭を回転させる
シェーレを助けるのは無理
助けたところで胸を撃たれて役に立たない
シェーレは見殺しにするとして、マインを囮にする
駄目だ
マインは囮にするにはダメージを負い過ぎている
なによりクビョウはアカメから逃げ切る手段がない
水竜の剣の制限時間が過ぎれば疲労が押し寄せアカメに殺される
無茶でも無謀でも無理でもアカメと生物型帝具を一人で打倒するしか生き延びる方法はない
そう結論付けたクビョウは、しかし、括目する
シェーレに飛びかかるヘカトンケイルに横蹴りをぶちかます頭領の姿があった
「あんまり遅いから迎えに来ちゃった」
頭領は撃たれたシェーレに薬を飲まして地面に這い蹲っているマインを拾い上げて、こちらを見る
アカメは新手を警戒して動きを見せていない

「こんばんは。お仕事ご苦労様。この子達は私が貰っていくわね」
それは撤退宣言
クビョウは脱兎のごとく全速力で戦線離脱を図った
それを逃すアカメではないが、黒い壁が起立してアカメの進路を遮った
「『蠢くもの』……っ！」
黒い壁は虫の群だ
一匹一匹が人体を軽々と喰い千切る顎を持つ
昆虫型の危険種と考えていい
厄介だ
一刀で黒い壁を引き裂く
生きている以上、蠢くものも村雨の呪いからは逃れられない
クビョウの姿はもう見えない
厄介なのは虫ではなく、虫を使う女はオールベルグの頭領
今のところ、実力は未知数なのだ
そんなことお構いなしに、横蹴りから復帰したヘカトンケイルは遮る蠢くものを薙ぎ払いシナズに接近する
「あら？」

余裕の表情でヘカトンケイルを見上げている
ヘカトンケイルは筋骨隆々な腕を力強く打ち下ろす
直撃だ
『ギ……!?』
ミンチにしてやった
筈なのだ
けれど、死体がない
倒した筈のマインとシェーレ姿もない
ヘカトンケイルは辺りを見回す
敵は影も形も残っていなかった
アカメは構えを解く
この場に残る殺気は腕を失いながら戦意喪失していないセリューとその帝具ヘカトンケイルのみ
つまり、ナイトレイドを一人も仕留めることが出来ずに逃げられたのだ

褒美を斬る！

ナイトレイドのアジトは帝都から北１０ｋｍほど離れた山の中にある
依頼を終え、帰ってきた仲間を迎えるには空気が重かった
まるで御通夜ようではないか
「シェーレが……」
普段の強気なマインらしくなく暗い表情で頭を垂れる
彼女自身、ヘカトンケイルに両腕を折られて痛ましい姿を晒している
けれど、シェーレに比べれば、この程度のダメージは些細なことだと腕をギュッと強く握る
自罰的に痛みに甘んじる
「……ッ！」
マインの表情から察し、マインから齎された凶報に、ナイトレイドの皆はやりきれない思いを胸に宿す
ブラートは歯を食いしばり俯く
ラバックは溢れ出る涙を拭う

レオーネは怒りと悔しさに揺れ動く
ナジェンダの表情は見えない
誰も声を上げない
その中で一人だけが、憤怒の形相を露わにしていた
「シェーレ。惜しい女の子を亡くしたわ。私が抱く前に死んでしまうなんて、くすん」
「私は悪くないですよ?」
泣いているが本気なのか演技なのか判断しずらいシナズ
責任を追及されないように先手を打つクビョウ
空気読めとっこんでくれる者はいない
「敵討ちだ!!」
シェーレを殺したのは誰だとマインとクビョウに問う怒り狂うタツミ
ボスが窘めるのも聞かず、仲間の仇を討つと喚くタツミにブラートは拳を振りかぶる
血が出るほど強く握っているブラートの拳は重くタツミは吹き飛ばされる
「見苦しいぞタツミ! 取り乱すな!!」
いつ誰が死んでもおかしくない
それを覚悟してナイトレイドに入ったのではないのか、とブラートは熱く叱りつける
拉致って入るか死ぬかの選択肢をタツミに突き付けていたのはナイトレイドだった

はず、とクビョウは思い返すが言うと怒られそうなので黙っていた
仲間になってそう長くないのにシェーレに泣くほどの情を持ったタツミを甘く、危ういとクビョウは感じた
仲間は大切だが、死んだら、ただの肉の塊なのに
「本当に見てらせませんわー」
ナイトレイド一同が盛り上がる中、一人遅れて登場したライラは白けた顔で言う
「シェーレ、死んでませんのよー」
「「……」」
ライラのつっこみが真実です、はい
全員が冷静になるのにそれなりに時間を要した
結果、マインは「シェーレがやられた」こそ言ったが、一言も「シェーレが死んだ」とは言ってないことに気付く
マインのオーバーリアクションにあたかもシェーレが死んだと思い込んだのだ
それを知っていたクビョウとシナズは勘違いから始まった真面目な空気に付き合ってられなかった
もっとも、シェーレが死の淵を彷徨っていたのは確かだ
一命を取り留めているが目はまだ覚めていない

心配しないでも、いずれ覚めるとライラが太鼓判を押している
「ライラさんって貴族みたいなのに医療の心得があるんだな」
意外だなー、とタツミは漏らす
さん付けなのは呼び捨てにした際、頭が高いと蹴られたからだ
マインに言われれば生意気な女と怒っていたが、ライラは大人の女という風格と高貴な雰囲気で文句を言う気にならなかった
単純にマインと違って小さくないし、胸もあるから仕方ないね
「貴族みたいなではなく貴族でしてよ？元ですけど」
「元？貴族様がなんで殺し屋に？」
「家族が私以外殺されましたの。だから、生きるために仕方なくここに来ましたの。別にシナズがいたからという訳ではありませんから誤解しないでくださいな！」
「は、はぁ」
後半の謎の強調にタツミは引き気味だ
シナズさんに付いてきたことが丸わかりなのだが、本人は認めていない
「医療の心得については大したものではありませんの。独学ですから、応急処置程度にしかなりませんもの」
ライラが医療系の技量を嗜む程度に身に付けているのは不本意の結果だ

彼女の両親に虐待ともいえる愛情を注がれて育った
外に出ることのないライラでも両親の愛情が歪であると理解していた
歪な愛情から逃れる術を持たないライラは生きるために必要だからそういう技術が自然と習得した
手術が成功するかの実験にうってつけのモノはたくさんあったから
けど、焼石に水
いずれ両親の愛に押し潰されるのだと諦めていたライラを引き上げてくれたのはナイトレイドに吸収合併されたオールベルグだった
それだけのこと
「私（わたくし）の治療は本当に応急処置でしかありませんから、革命軍の医者のところに連れていくべきですわ」
「感謝する」
「礼には及びませんのよ？」
ライラは、ナジェンダの礼よりシナズのご褒美の方が嬉しい
クビョウより後に加入したのにオールベルグにライラが一番染まっていっていた
それはそうと、帝都からアジトは１０ｋｍも距離がある
胸部を撃たれたシェーレが１０ｋｍの帰り道に耐えれるほど傷は浅くなかった

移動中の最中にシェーレが死なずに生きていることが不思議なのだ
しかして、シェーレを失うかもしれなかった大事を隠れ蓑に、その違和は流された
※　※　※
ナイトレイドに逃げられた後、アカメは困った
帝都警備隊に混ざってクロメが駆けつけたのだ
まさか、帝都警備隊に配備されている笛の音でアカメがいるとは思うまい
何故、アカメの場所が分かったのか聞いてみた
クロメはさも当然のようにこう言った
「だって、お姉ちゃんの臭いがしたもん」
「そうか」
（今ので、納得した!?）
セリューを介抱していた兵士はクロメの姉への偏愛に引き、姉の妹至上主義に大層驚いた
「アカメさん、申し訳ありません！アカメさんの手を借りながら賊を一人も狩れませんでした……ッ！」
「は？あなた誰？なんでお姉ちゃんに馴れ馴れしくしてるの？」
姉妹の会話に割って入ったセリューの存在に初めて気付いたクロメから狂気が漏れ

出る
帝都警備隊は身を僅かに引く
体が危険信号を出している
セリューは、けれど気にしなかった
引かなかった
セリューはクロメに負けず劣らず、歪んでいるのだから
正義は悪に屈しない
自分以外の正義にも屈しないのだ
狂気（正義）と狂気（独占欲）は譲ることなく睨みあう
一発即発の空気
ヘカトンケイルは奥の手の代償で動かない
両腕をエクスタスに落とされ、セリューは疲労困憊にある
セリューは一瞬で殺される
そんなビジョンを想像した帝都警備隊だったが、そうはならなかった
「クロメ」
「なぁーにお姉ちゃん？」
鶴の一声で、狂気が嘘のように引き、陽気な声でクロメはアカメに振り返る

安堵で胸を撫で下ろす帝都警備隊
「一緒に帰ろうか」
アカメはクロメに手を差し出す
「うん！」
当たり前のようにアカメの手を取るクロメ
美しき姉妹愛に帝都警備隊は何も言わず見送った
事情聴衆はセリューにすればいい
姉妹の間に割って入るのは後が怖いから勘弁してほしいのが本音だ
セリューの意識は、もうない
死んでませんよ？
※　※　※
帝都に帰還したエスデスは皇帝に謁見した
そこで皇帝は褒美として黄金を与え、次の仕事を言い渡す
幼き皇帝は大臣に命じられた通りに命令を下しているに過ぎないが、やはり操り人形
でも皇帝のカリスマは揺らがない
とはいえ、エスデスにとって実力の伴わないカリスマなど無用の長物
力無き者は淘汰される

それがエスデスの価値観だ
皇帝よりナイトレイドの一掃を命じられたエスデスは一つ願いを申し上げる
帝具使いには帝具使いをぶつけるのが有効
帝具使いを五人用意してほしいと要求した
それに恋もしてみたいとか
ただでさえ数の少ない帝具使いを求めてきたことより、あのエスデス将軍の口から恋などという単語が出てきた方が衝撃的だった
エスデスが退室した謁見の間で大臣と皇帝はエスデスの要求してきた男のタイプとやらに目を通す
恋など似合わないエスデスの意外過ぎる言動に大臣は穴が開くほどに紙を凝視する
1．何よりも将来の可能性を重視します。将軍級の器を自分で鍛えたい
2．肝が据わっており、現状でも共に危険種の狩りが出来る者
3．自分と同じく、帝都ではなく辺境で育った者
4．私が支配するので年下をのぞみます
5．無垢な笑顔が出来る者がいいです
以上の五つの条件が丁寧に、箇条書きされていた
大臣はギリギリ二つ目に掠っているだけでその他はアウトだ

（なるほど、恋の条件もドＳですな）
　将軍ではなく将軍の器というのがネックだ
　大臣に人の眠れる才能を見つけ出すなどと芸当は出来ない
　協力してやりたいのは山々だが難しいと寿司を食う
　大臣は側に控えている二人組に声をかける
「どう思われますか執事長、侍女長？」
「そうですね。将軍級の器というのがどうにも……」
　先に答えた男、執事長カゲロウは如何にも不健康そうな青白い顔をしていた
　宮殿ではそのうち過労死するのではないかと噂されている
「失礼。私が統轄管理している部下の中に無垢な笑顔をする者がおりません」
　侍女長ダスクはエスデスの無茶ぶりに顔色を変えず、やはり、無理であるという
　その染み一つない陶器のような肌により強く作り物じみた美しさを強調されていた
（最後以外、当てはまる人がいるんですか……！）
　カゲロウは自分の知らないところで宮殿使用人の平均戦闘力が上がっていることに胃がキリキリ痛む
　彼の顔色が悪いのは帝国の腐敗だけが理由ではないだろう
「そちらではなく帝具使いのことだったのですが……、いいでしょう」

帝具使いの使用人の引き抜きは厳しいらしい
適当なところから見繕うとしよう
エスデス将軍のせいで仕事が増えるので、代わりにエスデス将軍に仕事を減らしてもらおう

元大臣を斬る！

帝都近郊を馬車と護衛の兵士が進行する
重税により雀の涙ほどの収穫も差し出し、餓えと寒さに耐える民
これでは冬を越せるかも危うい
どこの村も似たような状況だ
帝都ばかりが華々しいが、帝都から出れば荒れ果てた不毛の地と、死を待つばかりの弱者民
反乱軍が何かをするまでもなく、民は死に、遠くないうちに帝国は滅亡を迎える
そんな民を憂い、隠居していたオネストの前任の大臣チョウリは帝都に向かう
命欲しさに隠居などしていたら娘のスピア達の未来はない
「こうなったらワシはあの大臣とことん戦うぞ」
「父上の身は私が守ります！」
娘は本当にいい娘に育ってくれた
勇ましすぎて嫁の貰い手がいなかったり、護衛より強いのが玉に瑕か
それとき馬車が止まった

「……また盗賊か!?治安の乱れにも程がある！」
チョウリが帝都に向かう道すがら盗賊に襲われた数は二桁を越している
彼等は生きるために盗賊になるざる負えなかった者だ
治安を悪化させ、彼等を悪の道に引き摺り落としたのはオネストだ
やはり、オネストを放置するわけにはいかない、とチョウリは襲撃の度に覚悟を強くする
彼等のためにチョウリは帝都に急いでいるのに、その邪魔をするのが救うべき民であるとは皮肉な話だ
「今までと同じように蹴散らす！相手が女子供だからと油断するな！行くぞッ！」
仕方なく盗賊に身を窶したとはいえ道を塞ぐなら振り払わねばならない
スピアは護衛を指揮し、容易く盗賊を潰してきた
そして、必死な弱者の執念はこちらの喉を食い千切りかねないということを学んだ
だから、女が二人であっても油断することは出来ない
「行くぞ！」
スピアの号令で護衛は盗賊に飛びかかる
殺す必要はない
（悪いが、腕と足くらいは覚悟してもらう！）

油断するな、といったスピアだが、無意識に相手を見下していた
毒蛇の巣に出向くまでもなくチョウリ達の首元に毒蛇の毒牙がそこまで迫っていたのだ
「競争だよお姉ちゃん」
「葬る」
チョウリの集めた護衛は全員強者揃いだ
盗賊程度の相手なら過剰戦力に違いない
ただ戦う相手が悪かったのだ
強者とはいっても一般の兵の域を出ない護衛達は一方的に蹂躙された
護衛達は勇ましくクロメとアカメに踊りかかる
クロメは駆け足で八房を抜刀する
アカメは歩きながら村雨を振るう
雑兵はクロメに殲滅され、間一髪逃れたスピアは、アカメに槍を打ち落とされ、追撃の蹴りを腹にもらい蹲る
「強すぎる……私の槍術が……」
「この中でお前が一番強かった。誇っていい」
「気休めにもならないな……」

アカメに気休めのつもりなどなくただ事実を口にしただけだが息切れ一つ起こさず自分達を圧倒した敵を前にしてスピアがそう思うのは無理もない
「アカメだ。恨んでくれて構わない」
スピアに名乗り返す余裕はなかった
絶望に染まる顔で死神（アカメ）の顔を見上げることしか出来ない
アカメは刀を振り下ろした
「へへっ、私の勝ちだぁ」
無邪気に踊るように馬車から降りてきたクロメは、その手に老人の生首を持っていた
標的、チョウリの首だ
「倒した数での競争じゃなかったのかクロメ」
「違う違う。どっちが先に標的を殺れるかの競争だよ」
「なら、私の敗けだな」
妹に激甘のアカメは後出しジャンケンだろうと可愛いと受け入れる
返り血を浴びて尚、笑うクロメはどこか妖しく美しい
シスコンフィルターがかかっているアカメは怒っているクロメも可愛いと言うに違いない
「やったー！じゃあ、罰ゲームでビラ撒き一人でやってね！私は人形（死体）遊びしてるから終

わったら教えて！」

「程々にな」

アカメとクロメはエスデス軍の所属となった

上司のエスデスからの最初の命令は大臣と対立する文官の暗殺

そして、『ナイトレイドによる天誅』と書かれたビラを現場にばら撒くことで罪をナイトレイドに被せることだった

標的はブドー大将軍の庇護下にある

正面から始末出来ないからといって手段が稚拙すぎる

これではナイトレイドの名を騙っているアカメ達を本物が始末しに来るのも時間の問題だ

しかし、腐っても帝国を牛耳る大臣の事だ

ナイトレイドが出てきて、ついでに始末出来れば良しくらいに思っているのだろう

敵前逃亡をエスデスは許さないと思うが、クロメが危険な目に合うようならサブミッション（ナイトレイドの始末）など投げ出す覚悟だ

チョウリと護衛達を葬ったアカメはそれでも周囲への警戒を怠らなかった

※　※　※

帝都で文官の連続殺人事件が起きている
被害者は良識派の文官6名とその警護の人間が多数
これ自体、反乱が成功した後の貴重な人材を失う痛手ではあるがナイトレイドが動く案件ではない
問題は殺害現場に『ナイトレイド』がやったという犯行声明が残されていたこと
分かり易い偽物
普通にバレる
だが、殺された文官の警護は厳重
偽物はそれを全滅させている
やはり帝具使いの集団であるナイトレイドの犯行ではないかという見方が増えてきた
偽物にいつまでも好き勝手を許すようではナイトレイドの株は下がる一方
罠と理解していても飛びつく以外の選択肢はない
罠であろうと捻じ伏せる
ナイトレイドの名を騙るとどうなるか見せつけてやれ
ボスから指令が下った
狙われている文官は3人

うち宮殿の外に出る予定があるのは2人
ナイトレイドは二手に分かれて文官の護衛
及び偽物の――――始末
タツミとブラートは『竜船』に乗り込む
※　※　※
帝都近郊の村で、国を憂い、民のため心を痛める文官ビマクは民に備蓄米を振る舞い
近郊の村を回るのが日課になっていた
ビマクも分かっている
この施しは焼け石に水
貧困の大本を絶たねば、いずれ備蓄米は尽きる
時間稼ぎにしかならないことを
大臣を倒さねば帝国に未来はない
そんな大臣に反感を持つ文官達（古き友）が次々と暗殺されている
今日は自分が殺されるかもしれない
今日は竜船に乗りセレモニーに参加している文官が殺されるかもしれない
そんな不安を胸にビマクは民に仮面の笑顔を見せる
（この命、最期まで民のために……）

そう祈るビマクの知らぬところで始まる
彼を狩らんとする獣と彼を守らんとする狩猟者の光を浴びることのない戦いが
「どうやら、お出ましだ……」
備蓄米を振る舞っていたビマクを見守る影が動く
ラバビマクに背を向ける
ラバの糸の結界に反応があった
「そんじゃま。いっちょ殺るか」
獅子は軽快に獲物に向かう
三獣士はラバックとレオーネのいる村に現れたのだ
「アハハハ、今回はアカメがいないから顔の皮コレクションが作れるよ！」
「経験値がたっぷり稼げるぜぇ！」
「二人とも油断するなよ。そろそろ本物（ナイトレイド）が出てきてもおかしくない――――
いや」
森を歩くリヴァは糸の結界を――――踏み潰した
「心しろ」
獅子が三獣士の前に降り立つ
リヴァは手袋を外す

ダイダラは樽を降ろす
ミャウは笛に口を付ける
ラバはただ息を潜める
村から外れた森で帝具使いの死闘が幕を開ける

三獣士を斬る！（前半）

森では殺し合いに釣り合わない美しい音色が流れていた
戦況は控えめに言ってレオーネの不利だった
中身のない樽に腰掛け笛を演奏する三獣士ミャウ
彼は名門貴族の子息であるが、エスデスのSっぷりに、帝国一のSであると思い上がっていた己を恥じてエスデス軍に入隊した
ミャウは三獣士の中で一番惨い趣味をしている
今も笛の帝具『軍楽夢想スクリーム』で聴く者を無気力にする演奏をしながらレオーネの皮を剥ごうと虎視眈々と狙っている
レオーネは体が重くなるのを感じ、原因であるミャウを早々に潰そうとする
が、ダイダラが立ち塞がり抜けられない
「どけ！」
「音が効いてるのに良いパンチじゃねぇか！」
邪魔なダイダラをどけようとするもスクリームの無気力化を受けたレオーネの突きは、弱く軽々しくダイダラに受け止められる

「一発止めたからって調子に乗るな！」
余裕をこいているダイダラに蹴りを直撃させて怯んだ僅かな隙を狙い、ミャウへ向かうも
「がっ!?」
水の壁を叩きつけられ押し戻された
ミャウの前にはリヴァが動くわけでもなく責めてくるでもなく構えている
リヴァがエスデスより授かった指輪の帝具『水龍憑依ブラックマリン』は触れたことのある液体を自在に操る
ダイダラが担いで運んだ樽に詰められていた水が壁となりレオーネを押し返したのだ
水浸しになったレオーネはダイダラの追撃を掻い潜り、またもミャウを目掛け疾走する
水の蛇は獅子を叩き潰す
戦闘というには余りにも作業的だ
「流石だなナイトレイド。スクリームの演奏を聞きながら私とダイダラを相手取るとは」
「ハ……ッ、オッサンこそ」

レオーネはふらつく足に拳を叩きつけて喝を入れて、リヴァを睨み付ける
リヴァはダイダラを抜いたときしか手を出してきていない
とてもダイダラとリヴァを相手出来ているとは言えない
（糸の帝具使いはどこだ？）
一方、リヴァは決してレオーネを侮っているわけでなない
ナイトレイドがもう一人潜んでいることに勘づいているからこそ警戒しているのだ
スクリームの演奏を聴く者は無気力になるが意思の強い者は関係なく動いて立ち向かってくる
主であるエスデスなどスクリームの演奏を聴いても一切影響を受けなかったのだ
殺し屋風情が主と同格とは毛ほども思っていないが油断は大敵だ
いつ襲ってきても対応できるように待機している
「お前、ナンで帝具を使わない？」
レオーネはダイダラに向き合う
手負いの獅子の眼光は爛々の鋭く死んでいない
ダイダラは潰し甲斐があると獰猛に嗤う
「俺は最強になる為、戦って経験値が欲しいんだよ」
三獣士ダイダラは最強を目指し、武者修行の途中でエスデスと一騎打ちをし、初めて

の完敗を喫し、その強さに心酔に忠誠を誓った
それでも最強への道を諦めたわけではない
いずれ敬愛なるエスデスに肩を並ぶために膨大な経験値が必要なのだ
ベルヴァークを使えば呆気なく殺してしまう
それでは経験値にならない
だから、素手のレオーネに素手で挑むのは当然であるとダイダラは言う
「そうか。後悔するなよ!」
獅子は倒れない諦めない喉ぼとけを噛み千切らんと噛み付く
無謀な挑戦者を見て、やはりダイダラは嬉しそうに嗤う
※　※　※
大運河を悠々と行く『竜船』
その完成セレモニー乗り込んだ招かれざる客はタツミとブラートだけではなかった
華やかな立食パーティーで無作法に無遠慮に料理を掻っ攫う姉妹がいた
悪目立ちするのも構わず食い散らかす姉妹を見て良識派の文官を暗殺しに来たなど思うものはそういないだろう
というのは建前で、飯があった、我慢できない、だから食べる、が本音であった
食べながらアカメはどうしたものかと考えていた

肉の護衛カーテンに囲まれている標的を葬るのは容易だ
だが、セレモニー中に殺るには目撃する目が多い
クロメは皆殺しにすればいいと気軽にいうが、アカメは好き好んで殺戮者になりたくはない
出来れば、目撃者を少なく、かつ、ナイトレイドに罪を押し付けたい
三獣士のミャウなら簡単に殺さず目撃者を無力化できる
竜船には三獣士が乗り込むべきだった
それなのにエスデスはアカメとクロメに竜船に乗り込むように命じた
これしき乗り越えてみろとエスデスに試されているとアカメは取った
エスデスがただドSなだけなのだが、知らぬが花という言葉がある
それはそうとこのテーブルの料理は平らげてしまったので移動するのだった
そんなセレモニーの料理を食らいつくそうとしている姉妹に声をかける者がいた
「よォ、いい食いっぷりじゃねェか」
柄の悪そうな顔をした執事だ
アカメとクロメは顔を見合わせる
「誰だ？」
「知らない」

姉妹の知らない男が声をかけてきた
姉妹の思考はシンクロする
（ナンパか）
アカメから僅かに、クロメから諸に、殺気が放たれる
最愛の者に粉をかけようとはいい度胸だ死にたいのかと過激極まりない姉妹の殺気に、良識派の文官を護衛している黒服に緊張が走る
「おいおい、急におっ始めるつもりかァ？ハッキリ言って、エスデス軍のペットは教育がなってねェな」
ゲラゲラと下品に笑う男
アカメは男がエスデス軍と口にしたことで冷静になった
アカメに倣いクロメも敵意を収める
護衛のお兄さん方もホッと胸を撫で下ろす
あの男が戦闘を始めればセレモニーは台無しになってしまうところだった
「何者だ？」
「ハッキリ言ってテメェから名乗るもんだろうが。まぁ、知ってるからどうでもいいけどよ。俺は帝都宮殿使用人、フランオス。殺り合うってなら相手してやんよ」
同じく帝国に仕える身でありながらフランオスは命の奪い合いを提案する

こいつ頭おかしいと思うクロメだが、クロメのシスコンぶりも負けていないと指摘する者はいない
アカメにはフランオスの目がダイダラと似た戦いを渇望する者の目に見えた
だが、それがダイダラのものより危ういものであることまでアカメは見破れなかった
気付くにはきっと矛を交えるしかない
「あぁーー・フラン君また喧嘩騒ぎ起こそうとしてるですぅ！・」
再びボルテージを上げ、張り詰め始めた空気を台無しにしたのは一人の侍女だ
フランオスは舌打ちをして振り返る
「無理すんなメヌイ！・ですぅ、なんて歳じゃねぇだろうが！・」
メヌイと呼ばれた眼鏡をかけたドジそうな女性は酷いですと言いショックを受けて崩れ落ちる
芝居がかった動作故に、本気なのか判断しにくい
一見隙だらけだが人は見かけによらない
チェルシーから宮殿の使用人には帝具使いの手練れが数人いると聞いたことがある
使用人がわざわざ宮殿の外に出て竜船に乗っているのはそういうことだろう
アカメとクロメに話しかけてきたのだ
大臣に付いているエスデスの部下であるアカメとクロメを疑って、監視しているのだ

アカメは思う
皆殺しにするのは無理であると
標的を殺すためには監視を掻い潜らなければならなくなった
竜船で争いは起こらず――――
※　※　※
「いいぜぇ！最高だ！潰し甲斐がある！」
「オラオラ！」
レオーネはダイダラと殴り合いながらスクリームの演奏に耐性を付けていた
調子が戻ってきたレオーネの拳はダイダラには荷が重い
殴殺されかねないと感じたダイダラはベルヴァークを手にしていた
それでもダイダラの表情には喜色が見える
互いの一撃は命を易々と刈り取る
ダイダラに殴られた傷はレオーネの帝具『百獣王化ライオネル』で得られる超回復力の恩恵で無いも同然だ
対してダイダラはタフだが殴り合いで受けたダメージが確実に残っていた
ダイダラはベルヴァークを投じる
何度目になる動作か覚えていないが獅子は一度掠って以来、ベルヴァークの刃で捉え

ることが出来ていない
戻ってくると分かっていれば躱すのは難しくない
「どうしたどうした！遅くなってないか!?」
傷は回復できても疲れまでは回復しない
それでもレオーネの調子は絶好調だ
レオーネはスラムで育った
親の顔は知らない
貧乏どころの話ではなかったが泥水啜ってでも飢えを凌いだ幼少期
同じく親無しの仲間達がいたから寂しくはなかった
大人になると生活は安定した
金はないが税を払わなければ生きていける
帝国の偉い奴等は高い税を毟り取る癖に、税を国民に還元せず私腹を肥やすばかりで嫌いだ
目の前にいれば殴り殺してやりたい位だ
ある日、貴族（クズ）がスラムの子供を馬で踏み殺すゲームをしているところに出くわした
スラムではよくあることだ
よくあることだが気に食わない

気に食わないから殴り殺そうとしたら普通に出来た
貴族はこうも簡単に殴り殺せるのかと脆さに驚いたが、自分の拳が獣のようになっているのにはもっと驚いた
闇市で買い叩いたベルトは帝具だったと貴族の護衛を撒いた後に気付いて大笑いした
思わぬ掘り出し物だった
それからレオーネは気に食わない奴は懲らしめるか、殴り殺した
レオーネを称賛する者はいても止める者はいなかった
ここはスラム、アウトローの掃き溜めだ
やがてレオーネの噂を聞きつけた革命軍にスカウトされ、大臣を殺せると聞いてナイトレイドに入った
（どうして今、こんなコト思い出してんるんだろな……）
敵は斧を振り上げている
腹ががら空きだ
図体の割りに力も早さもあるがレオーネには及ばない
腹に穴を空けてやろうと足に力も込めて――――激痛が走った
足に穴が空いている

水に撃ち抜かれたと気付いたときには手遅れだった
「水塊弾。少々、質も量も落ちるが、動きを止めるには十分だろう」
これだけ出てこないとなると糸使いは逃げたのだろうとリヴァは判断した
逃げたにしろ、援軍を呼びに行ったにしろ
これ以上の長居は無用
リヴァは無常にレオーネの足を止めた
レオーネはリヴァのことをダイダラを抜いたときしか出張ってこないからと失念していた
「あばよ。楽しかったぜぇ」
振り下ろした
直後、ベルヴァークの刃はレオーネに血に濡れる
（あぁ、そっか。これが走馬灯ってやつカ）
獅子は不思議な納得を得て地に伏した
「ふぅー、ナイトレイドはいい経験値になったぜ。これでまた最強へ一歩前進したな！」
「まだ気を抜くなよ。まだ標的の暗殺が住んでいない」
「わかってるけど、僕疲れたー」
「気張れよ。帰ったら料理を振る舞ってやる」

（要らねぇ……！）
（あの腹ペコ姉妹が遠慮する料理だよ!?）
ナイトレイド一人を狩った喜びに浸る余裕を消し去るほどリヴァの創作料理は危険だ
リヴァ本人は料理が得意なつもりだが、彼のオリジナリティが料理を兵器と変えている
その恐ろしさはエスデスを数秒気絶させるほどで帝具並だとダイダラとミャウは恐れを抱いている
調理する本人は一切味見をしないから質が悪い
「そうだ！そのお姉ちゃんから帝具回収しなくっちゃね！」
「お、おぅ！忘れてたぜ！」
生命の危機を察知した二人は露骨に話を逸らす
リヴァの料理は気絶で済めば御の字、下手すれば命を落とす
ダイダラは自らの血の池に沈んでいるレオーネに歩み寄る
未だ、獣化が解けていないレオーネに迂闊に近寄るべきではなかった
それをダイダラが後悔することはない
無防備に接近したダイダラの顎を脚撃が叩き込まれる

衝撃は逃げ道はなく、首が飛ぶ
レオーネの文字通り命を振り絞った最後の足掻きだ
首を失ったダイダラの胴体が後ろ向きに倒れた後に、間抜け面を晒した頭が落ちる
「ザマーミロ……」
レオーネは不敵に笑うと、今度こそ変身が解けた
ライオネルの治癒力は瀕死からも戦線復帰可能だと言われている
だが、レオーネは血を失いすぎた
獅子はただでは死なず、最後まで噛み付いて見せた
「見事だ」
リヴァは仲間を失った悲しみより先に敵に称賛を送った
この敵は命を賭して自分の使命を全うした
これほどの実力があればリヴァ達から逃げるのは困難ではなかったはず
圧倒的不利と知りながらそれでも戦い抜いたのは糸使いを逃がす殿
ではない
やはり援軍が来るまでの時間稼ぎだったのだ
斯くして、それは叶った
「――――そう、レオーネは死んだのね」

死神の鎌はリヴァを捉えている

三獣士を斬る！（後半）

ミャウは喜んだ
ミャウとて、声が無駄に大きくて、煩くて、暑苦しくかったとしても、仲間（ダイダラ）が殺されれば怒るくらいの人間味はある
仇であるレオーネはとっくに死んで生ゴミになって転がっている
行き場のない怒りを解消しようとレオーネの皮を剥ごうとしたところに、ナイトレイドの新手が現れた
（僕ってば、ついてる！）
そんなミャウと対照的にリヴァの頬に汗が伝う
（勝てない）
元将軍のリヴァにとって相手との力量差を図ることなど造作もない
相手が誰であろうと何であろうと、たとえ己が死ぬことになろうとも、主の命は絶対に遂行する
それだけの覚悟と信条を持っているリヴァであるが、思わずに怯んでしまった
新手はエスデスほどではないがリヴァにそう思わせるだけの実力があると感じさせ

た

咽かえるほど濃厚な殺気に何故、ミャウは気付かないのか不思議でならない
（勝つのは無理でも、逃げるくらいならギリギリ可能ではないか……？）
リヴァはそう考え、その事実に愕然とし、頭を振りかぶり弱気な己を追い出した
（馬鹿な！エスデス様の命令は絶対だ！逃走など許されるはずがない！）
覚悟を決める
新手は相当な使い手なのは確かだが、リヴァとて弱兵のつもりはない
相打ちすら叶わぬだろうが一矢報いるくらいは出来る
殺気こそ漏れ出ているが新手は仲間の死体に釘付けでこちらに目もくれない
水の量が心許ないが、殺るなら今の内だ
樽一つ分の水を手繰り寄せ数本の槍を形成する
ミャウはスクリームに口を付けるが、まだ演奏しない
仲間の死を悼んで手を出してこない相手を挑発するのは悪手であると理解している
水で形成された槍は静かにシナズの背後を取り囲む
シナズはレオーネの死を悲しんだ
レオーネは野性味があって逞しく美しい女性
抱く前に殺されてしまうなんて無常ではないか

世界の損失である
これはラバックが呼びに来るのが遅かったせいだ
村で娘をナンパして部屋に連れ込み、楽しんでいるところにラバックが無粋にも入り込んできたので、いい感じに蹴りを決めてしまい失神させたことを棚上げして責任転嫁するシナズであった
レオーネを殺した敵を生かしておくわけにはいかない
そして、敵（ゴミ）を哀れみ、見下した
それぽっちの水量でオールベルグの頭領を潰せるとでも思ったのか、と
射出された水の槍に虫がまとわり付き、爆ぜた
「な……ッ！」
リヴァは声を上げて驚いたのは、何も先手を潰されたからではない
水が操作できなくなっていることだ
爆ぜた水はゲル状になり、地面に落ちていた
「この子達（虫）は少し特殊で、その体液は液体を固体にしてしまうのよ」
シナズはリヴァの驚きを見透かしネタばらしをする
ブラックマリンは装着者が触れたあらゆる液体を操ることが出来るが、逆に液体でなくなれば操作することが出来なくなるということでもあった

リヴァは何も言わない
シナズは会話のキャッチボールを望んでいるわけでもないので、構わず名乗り始めた
「我こそは死神オールベルグの亡霊
無情の影
汝を魂を同胞の手向けとせん」
開戦の合図だ
※　※　※
テーブルの下に潜んでいたブラートは聞いていた
インクルシオの透明化と石のようにジッと息を潜めることで完全に気配を消している
盗み聞きした限りだと、ナイトレイドの名を騙っていた容疑者はアカメとクロメ
名前はボスから聞いたことがある
ナイトレイドに勧誘されたという少女の名と、勧誘を蹴る理由になった少女の名だ
確証はないが、この二人が良識派の文官を討っていたらしい
（さて、どうするか）
ここで動くのは賢明ではない
何故か宮殿ではなく竜船にいる帝都使用人が、帝具使いである姉妹を牽制してくれて

いる
姉妹が強硬手段に出た場合、使用人が率先して止めに入るに違いない
使用人に戦闘力があるのかどうか甚だ疑問だが
（この男は強い。だが、俺程じゃないな！）
姿は見えないがブラートはそう確信する
とことん、ブレない漢である
セレモニーは概ね平和に過ぎていく
※　※　※
『オールベルグ』。帝国に滅ぼされたと聞いていたがナイトレイドに流れていたか」
伝説の暗殺結社の末路をリヴァは聞き及んでいる
オールベルグは、頭領や主力のメンバーは帝国の暗殺チームに倒され、アジトを帝国の帝具使いの占い師が探り出し、帝国の軍勢に乗り込まれ、壊滅した
その際、凄まじい抵抗で軍勢の六割を道連れにしたという
「おかげさまで私（オールベルグ）達の生き残りは二人っきり。逢瀬の時間は楽しかったけれど、チェルシー（あの子）、最後まで体を許してくれなかったのが残念ね。今はナイトレイドで建て直し中よ」
リヴァは、肩を竦めるシナズを注意深く観察しながら、ミャウに動きがないことを訝（いぶか）

しむ
いつもならスクリームの無気力化の演奏を始めているはずだ
背後にいるミャウに視線を向けるわけにはいかない
その隙にオールベルグはこちらの首を取って見せるだろう
リヴァの心を見透かしたシナズは言う
「貴方は毒に耐性があるのね。毒の鱗粉は充分吸い込んでいるはずなのに元気ね」
「まさか……」
「私はレオーネの亡骸を前にして惚けているほど、優しくないわよ」
蛾が飛んでいた
リヴァは悟った
オールベルグがここに来たとき、既に先手を打っていたことを
リヴァは毒に耐性を付けているが、ミャウは特殊な訓練を積んでいない
危険だ
すぐに蛾を打ち落とし、ミャウの解毒をせねば命が危うい
その上に、オールベルグを抑えるか撃退しなければならない
そのためにもブラックマリンで操作する水が要る
水源はある

大きな川だ
そこまで行けば、『深淵の蛇』も『水龍天征』も使えるようになる
しかし、問題は重なる
距離は決して遠くないが、そこに辿り着くまでオールベルグはリヴァとミャウを数回殺してもお釣りが出るほど余裕がある
（ここで果てるか……）
腹を括って、懐から一本の注射器を取り出す
これは解毒剤ではない
その対極にあるものだ
これを使えば可能性は低いながら、一矢報いれるかもしれない
代償に生存は諦めなければならない
ふと、笛の演奏が始まった
それは力強い音色だ
ミャウはこの曲のテーマは『不退転』と言っていた
毒に蝕まれたくらいで獣は引かないと知れ
音がそう語っていた
レオーネが好きそうな曲だと思い、シナズは聞き入る

「奥の手『鬼神招来』」
スクリームは聴いた者の感情を自在に操作する恐ろしい帝具であるが、演奏の間に演奏者が攻撃されては全てが水の泡と帰す弱点がある
自己の強化のみに集中すれば、演奏の時間は短く済む
演奏が終わると、ミャウの小柄な体は筋骨隆々なものへと変じていた
口元から零れる血を拭い、ミャウはリヴァの前まで歩く
普段の残忍な性格から想像も出来ないが、ミャウは本人が思っているより仲間想いだ
彼は、外道だが同時に仲間のために命を張れる漢であった
「リヴァ」
リヴァは動かない
そんなリヴァに、もう一度呼び掛ける
「リヴァ」
聞こえている
分かっている
ミャウの意図が理解出来る
ここに二人残ったところで無駄死にだ
リヴァは目を伏せて振り返った

「……また、会おう」
去っていくリヴァに、ミャウは振り返らない
「あれ？追いかけなくて良かったの？」
「おかしなこと言うのね？貴方を殺してゆっくり追いかければいいだけでしょ」
シナズは、クルクルと日傘を回して遊ぶ
ミャウを見るその目は底冷えするほど、冷たかった
※　※　※
セレモニーは無事終わった
蚊帳の外にいるタツミは船旅に疲かれた体を伸ばしている
けれど、気を緩めることなく互いに互いを監視する者等がいた
アカメとクロメ、フランオスとメヌイ
そして、インクルシオの透明化の制限時間故に、一旦生身になっているブラートだ
仕事はまだ終わっていない
しかし、クロメは心底楽しそうに笑うのだ
（お姉ちゃんとのデート楽しかったなぁ）
何しに来たのか覚えているのか不安になりそうなものだが、任務のことは忘れていない

ただ、最愛の姉との（そこそこ）ロマンティックな船旅デートの思い出に浸るくらい許されよう
クロメはとてもとてもご機嫌だった
だから
（皆殺しは勘弁してあげるね！）
悪魔は天使（シスコン美少女）の顔して微笑む
※　※　※
リヴァは森を駆ける駆ける
ミャウはもういないだろう
仲間の命と引き換えに手にした時間を無駄にはしない
死神が追い縋るより早く、川の水に触れる
水に触れさえすれば大技が使えるし、水を固める虫も圧倒的水量の前では無意味になる
森を抜け、水の音が近くなってきた
これで報われる
リヴァは背後を警戒していたあまりに気付けなかった
否、気付いた時には遅かった

川に沿って蟻の群があった
その蟻は巨大で腹部が歪に膨張していた
否、否、膨張を始めていた
やがて破裂した
リヴァは避けること叶わず、直撃した
足元から衝撃が叩きつけられ、爆炎がリヴァの皮膚を舐めるように焼く
「近くに水場があれば駆け込むと思ってたわ」
そこに罠を張れば容易く仕留めれる
予定通りに事が運んだと、シナズはほくそ笑む
しかし、多少、予想外のことが起きた
リヴァは爆発の衝撃を受けて尚、肉を焼かれて尚、前進を続けた
結果、川に飛び込んだ
水の中に飛び込んだ
ブラックマリンの本領を発揮出来るだけの、液体に触れた
シナズは警戒する
依然としてシナズの優位は揺るがないが、圧倒的な水量を相手取るのは骨が折れる
持久戦になる

沈黙が過ぎる
待てど暮らせど、リヴァは川から上がってこない
「逃げた？違うわね。気を失って流されたかしら」
まだ川の中に潜んでいる可能性もあるので警戒は続ける
川は思いの外、勢いが強い
流されたのなら追いかけるのは面倒だ
ナイトレイドには帝具を回収するサブミッションがあるが、シナズとしてはどうでもいい
革命軍に付いているのはオールベルグが傭兵として雇われていた過去があるのと、ナジェンダに義理があるからに過ぎない
オールベルグとしては革命はさして興味がない
というかそれほど乗り気ではない
リヴァのことは既に頭から追い出し、シナズはレオーネを早く弔ってやろうと来た道を引き返した
三獣士はこの日、終わった

延長戦を斬る！（前半）

竜船でアカメとクロメは結局、手を出すことはなかった
それでも、二人が竜船を降りた後に良識派の文官を殺すのではないかと思ったブラートは追跡する
故に、任務は失敗する
可能性が低いことに変わりはないが、彼が残っていれば結果は違ったかもしれない
良識派の文官のご老人もセレモニーが無事に終わり陸地に戻ってこれたことで気が緩んでいたのだろう
心なしか穏やかな表情で――――首が落ちた
「セイ……コウ……コウ……」
幽鬼のように現れた下手人は護衛に気取られるより早く護衛対象であった老人を殺した
その事実に気付いた乗客、降りているので乗客だったと言うべきだろうか
彼等は自分のことでもないのに大声で叫ぶ

人の死がそんなにも恐ろしいのか恐怖は伝染する
セレモニーの最後は阿鼻叫喚で彩られる
護衛達が下手人を取り押さえようとしたときには既に姿を晦ませていた
一部始終を見ていたタツミも混乱していた
だが、同時に理解した
任務は失敗したのだ
気を抜いたところを狙われた
いや、気を張っていたところでタツミは間に合わなかった
悔やんで見上げた空は快晴なり
※　※　※
騒ぎから任務が達成されたことを知る
（お疲れ様、ヘンター）
クロメの勝因は使用人、護衛、いるかもしれない仮想敵（ナイトレイド）の注目が自分達に集中していたことだ
文官を守る壁が有象無象（肉盾）のみになっていた
暗殺はヘンター単独で事足りた
「なんだ。あのジジイ殺られたのかよ」

「うわぁ……侍女長に怒られるですよぅ……」
使用人の二人は反応は薄く、現場に戻るつもりはないようだ
ブラートは仏頂面のまま来た道を引き返した
骸人形に犯行を行わせたクロメは愛する姉の手を引き、堂々と帰路に着く
アカメは少し困ったように眉を下げているが、可愛い妹にされるがままだった
寄り道して甘味処にでも寄ろうと鼻歌を歌う
※　※　※
今回の任務の失敗、負った痛手の報告
ナジェンダは煙草をふかす
ナイトレイドの名を騙る偽物がエスデス軍直属の三獣士と、あのアカメだと予(あらかじ)め知っていれば、もっとうまくやっていた
後悔を煙と共に吐き出すが、次から次へと湧いてくる
竜船での任務は失敗したが、生きている限り取り返しがつく
今回の失敗もタツミの成長の糧になってくれるはずだ
村の方は任務に成功したがレオーネを失った
死んだ人間を取り返すことは不可能だ
どんな帝具でも『死』だけは防ぐことが出来ない

タツミがレオーネの死を知ったとき、案の定激昂したがブラートが宥めた
拳で
タツミも二重の意味で身の危険を感じ取ったのか落ち着いた(青褪めた)
ラバックは現場にいながら何も出来なかったと強く責任を感じているようだが、放っておいても勝手に立ち直るだろう
普段の行動(慇りない嘱き未遂)から、強かで逞しい男であることをナジェンダは知っている
自分も感傷に浸っている場合ではないなとすっかり短くなった煙草を灰皿に落とす
煙草を吸い終えるのを見計らったかのようなタイミングで扉がノックされる
ナジェンダは短く入れと言う
一拍置いて入室したブラート
「ボス。話がある」
真剣な顔をしていた
「どうしたブラート」
ナジェンダは思考を切り替える
それくらいの余裕が出来ていた
兄のように慕っていたロクドウが死んだときなど三日三晩泣き腫らしたものだが、レオーネの死で受けたショックがそのときに比べて軽いことに内心で自嘲した

そんなナジェンダの内心を知ってか知らずかブラートは話し始める
「シナズの話を聞いたところ三獣士の一人に俺の元上司が混ざってた」
「それがなんだ？」
ブラートが元上司の仕出かした事に、責任を感じている……とは違う
「俺の元上司は爆発で死ぬ程やわじゃない」
「生きていると言いたいのか」
死体をシナズは確認していない
可能性としては有りだ
仮に生きていたとしても重体だとナジェンダは思っている
「リヴァ将軍は紳士なフリして結構頑固な性格でな。やるって決めたからには曲げねぇ。必ずリベンジに来る」
薄々、ブラートが言わんとしていることを察すナジェンダだが、先を促す
「結局、何が言いたい」
「そのときは俺が出る」
やさり、予想通りだった
ブラートはそういう男だ
「馬鹿を言うな。敵が一人で来る保証はないだろう」

「ない。ないが漢の魂がそうあるべきだって叫んでんだ。リヴァ将軍も一人で来るさ。俺を信じてくれ」
ブラートの言っていることは無茶苦茶だ
理論的ではない
言いすがろうとするナジェンダはブラートの目に見て黙る
ブラートの目には迷いはない
制止を聞いて止まる気もない
新しい煙草に火を付ける
「……」
長考の末、ナジェンダが絞り出した言葉は
「シナズがビマクに接触し、狙われていたことを伝えた。なのに、何を考えているのかビマクは村に滞在している。この機を逃せばビマクは次いつ出てくるかわからん。奴等が狙うなら、今だ。必ず、生きて帰ってこい」
「おう!」
リヴァが一人で出てくる可能性は低いが、重態であろうリヴァが出てくる可能性はもっと低い
無駄足になることを祈るしかない

祈らずにはいられない
エスデス軍は三獣士だけではない
最近、迎えいれられた二人をナジェンダは知っている
「アカメとクロメが出てきたときは」
「分かってる」
ブラートは背を向ける
その頼もしい背中は激しく燃えているように見えた
賢明なアカメはブラートに正面から仕掛けることはない
だが、クロメの行動は合理性に欠くことがある
ナジェンダは言いようのない不安をまた胸に抱く
※　※　※
ブラートの読み通りリヴァは健在だった
体のあちこちに痛ましく包帯を巻きつけている
されど、その眼光は獣の名を冠すに相応しいと言わざるおえない
「待っていろ」
その言葉は誰の耳にも届くことはなかった

延長戦を斬る！（後半）

リヴァが一命を取り留めたのは奇跡といってもいい
爆発に身を焼かれながら気を強く持ち、流れが穏やかな下流まで敢えて流されることでオールベルグを撒き、追撃を警戒して身を隠していた
いつまで経っても死神のような女が現れないことからリヴァは回復に専念することが出来た
とはいえ、全身の火傷を治すには設備がない
帝都に戻れば治療は容易だ
だが、仕事を完遂していない
主より命じられた仕事を終えるまで帝都におちおち帰れない
その場で応急処置を済ませ、身を隠して少しに仮眠を取った
仮眠のつもりが、睡魔に抗えず日を跨いでいた
情けないと立ち上がる
火傷は痛むが仕事をこなすには十分動ける
標的が村に滞在している可能性が低いことを理解しているが村に向かう

オールベルグが待ち構えていようが、次に敗北はない
迷いのない歩みはやがて止まる
正直こうなる予感は前からあったのだ――――手配書でその名を見たときから
※　※　※
――――予感は当たった
予想と違ったのは身なりくらい
久々に見る元上司は随分ボロい姿になっていた
まるで包帯男のような形相だ
「来ると思ってたぜリヴァ将軍」
「私はもう将軍ではないぞブラート」
「本当なら再会を祝して酒でも飲み交わしたかったんだが……、今は敵同士、斬らせてもらう」
「こちらの台詞だ。絶対に任務は完遂する。あの方のために」
ブラートはインクルシオを纏う
リヴァは川より引き摺ってきた水の龍を起立させる
「水塊弾！」
龍を構築する水の一部が槍となり射出される

それはシナズとの戦いの比にならない水量だ
「しゃらくせえ！」
インクルシオの副武装『ノインテーター』で全弾打ち払う
水塊弾でブラートにダメージを負わせれないことは百も承知だ
次の手の布石に過ぎない
「水圧で潰れろブラート!!深淵の蛇!!」
ブラートを飲み込み砕かんと迫る水の大蛇
「うぉおおおおおおおおおおおお!!」
圧倒的な水圧の怪物をも、ブラートは正面より斬り裂き捨てる
当然、リヴァは次の手を用意している
「全方位からでは止めれまい！濁流槍!!」
水塊弾が児戯だったかのような水柱が四方八方よりブラートに突き刺さる
されど、両者は止まらない
「水かけられたくらいで……俺の情熱は消えねえ！」
ブラートは水柱を耐えきって見せたが、負荷により鎧に傷が出来る
一部は欠けてブラートの肌が露見している
されど、両者は止まるはずがない

「分かっているつもりだ。お前とは数々の戦場を共にしてきた。その強さも、勇猛さも、私が一番良く知っている。だからこそ最大最強の奥義を馳走してやる!!」
川の水は干乾びた
それほどの水量
それほどの水圧
水の龍は一体でも超級危険種を屠れる
それを十体
大盤振る舞いだ
「水龍天征!!」
ブラートは熱い魂を持つ漢だ
だからといって敵の奥義をまともに喰らってやる程、愚かではない
ただ、逃げ場はない
「インクルシオオオオオオ!」
ブラートの叫びを掻き消し、水の暴威は大地を飲み込む
水飛沫が霧のように舞う
視界は閉ざされた
ブラートの現状は分からない

「やったか？」
「そういう台詞を吐くってときはな、たいていやってねえんだよ」
ブラートは透明化でリヴァの真正面に近付いていた
水龍天征は正面の一匹を気合いと根性で斬った
ノインテーターの一撃が容赦なくリヴァを捉える
「凌いだ……のか……。そうだな……そうではなくてはブラートではない……」
斬られ、血飛沫を上げ、倒れゆくリヴァの背後に待機していた最後の水龍が牙を剥く
「だが、意地でも道連れにさせてもらう」
「俺も信頼してたさ。あんたがただでやられるわけがねぇってな」
水龍の牙がブラートに刺さるよりも、展開を読んでいたブラートの一閃が速い
「見事」
リヴァはブラックマリンの力でここまで運び出して出来た水溜まりに沈む
リヴァはブラートに斬られた傷とは別の出血もあった
帝具の酷使による多大な負荷と、シナズにやられた火傷だ
もう助かるまい
奥の手は温存していた
だが、共にいくつもの戦場を越えてきた友に通用しないことは知れている

せめてインクルシオを削ぐことが出来ていれば結果は変わっただろう
「こんなもんでリタイアかリヴァ将軍」
「もう将軍ではないと言っているだろ。重体の老骨には荷が重かっただけのことだ。万全の状態であれば相討ちくらい持ち込めたというのに」
「ははっ、変わらねぇな。負け惜しみを言う癖」
負け惜しみのつもりはないとリヴァは言う
それが負け惜しみなんだよとリヴァは言う
久方ぶりに二人は声を出して笑い合った
これで酒があれば文句なしだ
「ブラート。一つだけ言っておく……。私がエスデス様に仕えていた真の理由は……」
謂れなき罪で投獄され、牢屋の中で腐っていたリヴァ
その手を引いて立たせてくれた主の姿は何より輝いて見えた
「あの御方を慕っていた……それだけだ」
「リヴァ……」
「分かってくれとは言わん。お前はこんな上司を持ってしまった――――許せよブラート」
「……ッ」

これを聞くのは二度目だ
だが、立派だと言ってやれない
道は分かたれてしまっている
ブラートは民の味方なのだから
リヴァはもう、何も言わない

「あまりにも遅いから迎えにきてみれば……逝ったかリヴァ」

声が聞こえた
気温が下がる
聞くだけで生存本能が悲鳴を上げる美しい声だった
※　※　※
ブラートとリヴァの戦い
その一部始終をエスデスは観戦していた
その死を見送った
エスデスとて血の通った人間だ
自分を慕う部下が死ねば悲しむくらいの感情はある

上手い甘味処を見つけたから三人に奢ってやろうと思っていたのに、これでは一人でいくことになる
アカメとクロメは駄目だ
甘味処の在庫がなくなるまで食う
リヴァとダイダラは甘いものが苦手だった
敢えて墓には甘いものを供えてやろう
森には首を落とされたダイダラと何か食い殺されたミャウがいた
これ以上、死体が損傷しないように、腐敗が進まぬように、氷漬けにしておいた
たった今、最後の三獣士も死んだ
助けることは出来たが、助けに入るのは不粋と思ったから見送った
三獣士は戦士としてその命を全うした
悪いのは弱かった三獣士だ
「仕方ない奴等だ。仕方ないから私が仇を討ってやろう」
ブラートは疲労も忘れて化け物（エスデス）に魅入られていた
美貌にではなく強者であるオーラに
男はいくつになっても少年の心を忘れない
自分より強い敵が現れたのなら

（燃え上がるじゃなぇか……！）
帝国最強と連戦
圧倒的不利
だからどうしたというのか
この程度の逆境は、熱い魂で乗り切ればいいだけのこと
ブラートの膨れ上がる闘志に呼応するように、エスデスの足元の水溜まりが音を立てて凍り出す
「さて、延長戦だナイトレイド。私を愉しませて見せろ！」
「参る！」
自分より強大な敵を前にブラートのとった手段は吶喊
悪手であり、勇敢である
エスデスは歩みを止めることなく、二人は接触した
ノインテーターがエスデスに届くより早く、エスデスと手がノインテーターに絡みつく
「凍れ」
「おおおおおお!!」
エスデスに触れられたノインテーターから氷結が始まり、インクルシオを覆い隠す

悪趣味なオブジェクトが出来上がった
「憤ッ！」
呆気なく終わる
否、否、ブラートは終わらない
氷漬けがなんのその
砕いて出れば問題ない
脳筋は侮れない
「ほう、氷を砕くか！面白い！」
「そんな柔な氷じゃ俺の熱い魂は止められないぜ！」
氷像からの復帰の代償はインクルシオの解除
インクルシオのおかげで一度だけゲームオーバーは免れたが、次はない
次に触れられれば死ぬ
だからといって、ブラートが止まる理由にはならない
「インクルシオを解かれて尚、向かってくる気概！大いに結構！私をもっと楽しませてくれ！」
インクルシオの鍵である剣を持ち、やはり吶喊するブラート
小手先だけの小細工などエスデスの前に如何ほどの意味を持つというのか

戦闘はそれほど続かなかった
短い時間だったが、濃い時間でもあった
仇討ちのつもりがすっかり楽しんだエスデスは敵に問う
「名前を聞こうか？」
「ナイトレイドのブラート。ハンサムって呼んでくれていいぜ」
完膚なきまでの敗北を得たのは初めてだったかもしれない
ブラートは最期の攻撃に挑む
※　※　※
ビマクはナイトレイドを名乗る青年（ラバック）に警告されたことを思い返していた
お前を守るためにナイトレイドの一人が死んだ
その死を無駄にしないために尻尾を巻いて、逃げて、隠れていろ、と言われた
それは出来ない相談だ
ナイトレイドのやり方にビマクは賛同できない
しかし、彼等は彼等のやり方で帝国を正しい形に戻そうとしている同胞だ
彼等にとって自分が餌だったに過ぎないことはわかる
それでも、志を同じくした誰かが死んだのならやるべきことは
「弔い合戦だろう」

村から離れた地点で騒ぎが起きた
そのときが来たのだと、ビマクは腹を括って自ら赴いた
自分の命を狙う刺客がエスデス将軍ということに少なからず驚いた
だが、アレは帝国の未来に必要のないものだ
命を賭してでも排除しなければならない
部下達も士気は充分
「さて、征くぞ」
「メインディッシュの後に、デザートまで出てくるとは気が利くじゃないか」
文官（ターゲット）が向こうからやってきたことにエスデスの口角が吊り上がる
大臣の頼みで始末するのはつまらない小物ばかりだが
（こいつは少しは骨がありそうだ）
像に蟻が群がる
ただで潰されてなるものかと必死に食らいつく蟻の姿を、誰が笑うことが出来ようか
像（エスデス）は誠意を以て、蟻を踏み潰していく
蹂躙されていく強者達
その散り様に美しさを感じずにはいられない
踊れ踊れ

その命潰えるまで
「私を愉しませろ！」
※　※　※
結論だけ言えば、ビマク達の奮闘はエスデスに傷一つ負わせれない惨敗だ
彼等の戦いは無価値だった
否、それはエスデスが否定する
彼等は弱かった
だが、最期まで戦い抜く姿勢は評価に値する
文官の癖に剣を両手に持って吶喊してくる
その目に敗北はなかった
エスデスは心底愉しめた
アレは決して弱者を蹂躙したのではない
戦士の戦であったとエスデスは高らかに謳う
ひとしきり戦いの余韻に浸るエスデスだったが、ふと違和感を得た
背を晒しているとはいえ、小動物がエスデスの前に身を晒すことはない
奴等は臆病なのだ
エスデスのような絶対強者に近付こうなどしない

だというのに、戦闘中におそらくリスのようなものがエスデスの近くを走っていったのを感じた
小動物だからと捨て置いたが、今考えるとおかしな話だ
そこまで考えてエスデスは考えを改める
次からは小動物が不自然に近付いてきたら仕留めよう
リヴァの手から指輪が消えていた
この日、村の周辺の小動物が一匹残らず狩り尽くされることになる
※　※　※
エスデスに気付かれていたとは露知らず、小動物（リス）だった者はホクホク顔で帝都まで帰還しようとしていた
チェルシーだ
ブラックマリン
危険な任務に見合った成果
チェルシーは既に帝具を持っているから無用の長物だが、革命軍全体の利益になる
オールベルグの他の三人と違って世直しを望むチェルシーはおおよそ革命軍に協力的だ
本当はブラートからインクルシオも回収したかったが、リスに変身していた身では些

か荷が重かった

剣（インクルレオの鍵）を担いでいれば気付かれない訳がない

それでなくても気付かれていたのだが、知らぬが仏というやつだ

暗殺者としてブラートは失格だと思うが、人間的には嫌いではなかった

レオーネとブラート

二人の犠牲で三獣士の壊滅

高い買い物だったが、帝国の力を少なからず削いだ

明日は仕事終わりにアカメを誘ってケーキでも食べに行こう

幕間　ある少年の記憶

少年の人生は殆どが暗闇に覆われていた
少年の両親は貧しいながら少年を愛し育ててくれた
少年は幸せだった
不満があるとしたら空腹感を満たしたことがないことくらいだろうか
少年は幼いながら、貧しい暮らしでお腹一杯食べれるほど食料がないのを理解していた
でも、子供の少年は我慢できなかった
村の牛があまりにも美味しそうに見えたから、我慢できず食べてしまったのだ
少年は両親に叱られてしまうと困った
でも、食べてしまったものは仕方ない
素直にごめんさないしようと家に帰った
やけに村が静かで雰囲気が違ったけれど少年には分からなかった
家に帰るとお父さんとお母さんが少年の名を呼んだ
呼ばれたから返事をした

そしたらお父さんは怖い顔をして、お母さんは泣いてしまった
どうしてそんな顔をするのか少年はわからなかった
困惑する少年をお父さんは蔵に押し込めた
きっと、牛を勝手に食べてしまったからお父さんはとても怒っているんだ
きっと、人のものに手を出したからお母さんはとても悲しんでいるんだ
少年は蔵の中で謝った
二度としないから出してと何回も何回も
でも、蔵から少年は出してもらえなかった
日の光が入らない暗闇の中で少年は声が枯れるまで謝った
喉が渇いた
お腹が減った
少年はこのままここで死んでしまうんだと泣いた
そうするとどうしたことか蔵が開いた
開けたのはおじいちゃんだった
おじいちゃんは少年にご飯を持ってきてくれた
おじいちゃんは謝りながら蔵から出てはいけないよと少年に言った
なんで?と聞いたけどおじいちゃんは教えてくれない

それからお腹が減るたびにおじいちゃんが食べ物を持ってきてくれた
来る日も来る日も少年は暗闇の中、おじいちゃんがご飯を持ってきてくれるのを待った
もっとも、暗闇の中で少年は朝も夜も分からない
どれだけの時間を蔵の中で生活したのか分からない
やがて、お父さんが動かなくなったおじいちゃんを蔵に放り込んだ
蔵はすぐに閉じられ、おじいちゃんは見えなくなった
お父さんが食べ物を盗む悪い人だと言っていた気がする
少年はおじいちゃんを揺するがそこには冷たいナニカしかなかった
おじいちゃんはどこにいったのだろう？
でも、オイソシソウダ
この日のご飯はとても美味しいお肉だった
いつまで経ってもご飯を持ってきてくれない
当たり前がご飯を持ってきてくれるおじいちゃんはここにいて
少年が■■てしまったのだから
少年は蔵の扉を叩くが返事は返ってこない
声を出そうとしても獣の呻き声しか聞こえない

声が出せなくなってしまったのか
扉をドンドンと叩く
ドンドン
ドンドンドン！
ドンドンドンドン！
ドン！ドン！ドン！ドン！ドン！ドン！
お腹が減ったよ
ご飯を頂戴よ
じゃないと■■ちゃうよ
気付いたら蔵の外にいた
きっと、お父さんとお母さんが許してくれたんだ
少年は喜んだ
いつの間にか手と口元が赤く濡れていた
お父さんとお母さんの姿が見えない
どこに行ったんだろう？
村の皆が怖い顔で鎌や鍬を少年に突き付ける
なんで酷い事するの？

なんで痛い事するの？
なんで傷付けるの？
優しかった皆がおかしくなっている
ギラギラした目で少年を怒鳴りつける
『怪物』と
少年は怖くなって逃げた
逃げて逃げてオナカガヘッテ
手を赤く汚して
逃げた先で、知らない人達が襲ってきて
また逃げて
逃げて
タベテ
タベテ
タベタ
嗚呼、オイシイ
もっと、もっと、お肉を頂戴よ
※　※　※

「アラ？急に大人しくなったわね」
男の人の声が聞こえた
生きたニンゲンを見るのは酷く久しぶりな気がする
気が付けばいつも少年の周りは赤色だけ
デモ、マダ、タリナイ
「この危険種、理性があるのかしら？いえ、違うわね……もしかして人間？」
男の人は少年を見ているようで見ていない
この男の人の目は初めてだ
おじいちゃんのように優しい目でもない
お父さんやお母さんの怯える目でもない
底が見えない昏い目だ
「食べるほどに際限なく成長する危険種……この子使えば最高にスタイリッシュな兵器が造れる！うふふ、アタシの『夢』に大いに近づくわ！」
少年は暗い檻の中でマッドでオカマなサイエンティストに出合う
ご飯をくれるいい人だ

幕間　それぞれの休息

「お姉ちゃんと恋人らしい行為をしてない」
「クロメ貴女疲れているのよ」
開口一番に実の姉との性事情の有無をし始めた同僚に、鋭いつっこみを入れた暗殺部隊の少女を誰が責めれようか
少なくともこの場にいるクロメ以外の少女は内心で、
（よく言った！）
このように称賛している
言われた本人（クロメ）は口を尖らせて不満気だ
実の姉妹で付き合うなんてナンセンスだ
認められるかそんなこと
暗殺部隊の女子達は声を揃える
もっとも本人はこれっぽちも聞きやしない
「一緒にお風呂入ったり、寝たり、色気出してみたりして誘ってるのに、お姉ちゃん何も

してこない」
「クロメは責めじゃなくて誘い受けだったというの……？」
そこじゃあない
問題は責めとか受けの話ではないのだ
「色気は置いといて、いつもやってるじゃ効果ないでしょうが」
そう、それだ
男女で、親しくない間柄で行えば効果的な手段だと言えるが、幼い頃から殆ど苦楽を（一時期を除いて）共にしてきた実の姉妹に効果的か
否である
アカメは今日もクロメは可愛いで済ませる
シスコンめ！
「それで皆に相談なんだけど、どうやったらお姉ちゃんを狼に出来るかな？」
自分から責めるのではなく、姉に野獣になってほしいとクロメはいう
なんという乙女なのか
乙女で合ってるのか？
「いつも貴女の馬鹿を止めてた私達に言う？」
「却下よ。却下」

暗殺部隊ガールズはノーという
アカメの気を引こうとクロメがやらかした騒動の数は思い出すだけで頭が痛くなる
クロメが馬鹿を起こしそうになったら、もしくは起こしたらアカメに勘づかれる前に処理すべし
それが暗殺部隊の共通認識である
「皆がお姉ちゃんの写真とか捨てた服持ってるの知ってるよ？」
「「「……」」」
却下されて引き下がるクロメではない
爆弾投下でクロメ以外は固まった
冷や汗が止まらない
クロメは笑っている
いつも通り、笑っているのだ
ただね
目がヤバい
「もしかして、気付かれないと思ったの？お姉ちゃんに近付く悪い虫を駆除してきた私が気付かないと思ったの？」
クロメの目が深淵に続いている

誤魔化でもしたら冥府に送られる
最近、部隊から抜けていたからクロメの脅威が薄れていた
故に、同時に警戒心も薄れていたのだ
彼女等は、アカメのことになると帝国最凶（誤字ではない）と名高いエスデスをも凌駕しかねない超ド級のシスコンの脅威を再び思い知ることとなった
暗殺部隊の仲間だから殺さずに済ませているとは本人の談
閑話休題（おしおきたいだい）
「で、お姉ちゃんをやる気にさせる提案ある？あるよね？ないなんて言わないよね？」
「イエス！マム！」
薬の副作用よりやべぇや
お仕置きが終われば命の危機が去ると思ったか馬鹿め
ヤンデレのギアは上がり始めたところだろうよ助けて
「色仕掛けで駄目ならいっそ媚薬でも盛ってしまえばどうでしょう！サー！」
「受けなんて似合わないこと止めて攻めてみればどうでしょう！サー！」
「辛抱強く、しかし、同性として意識されるようにアピールを……同性として意識って何だ？」
答．よくて友達エンドの意識じゃないですかね

暗殺部隊の休日は実に平穏に過ぎていく
ちなみに議論は『媚薬の使用』で決着がついた
後日、クロメが実行に移すも、毒とか食って耐性付ける野生児ガールアカメに効果はなかった
ただ、その日のお姉ちゃん色っぽかったと本人は捗ったそうです
何が？言わせんな
※　※　※
チェルシーがアカメに近付いたのは偶然と打算の結果だ
しかし、時間を共にするほどチェルシーの中の思いは強くなっていく
チェルシーはアカメに――――同族意識を抱くようになっていた
同僚で長年の付き合いであるシナズが同性愛者であるのは承知している
彼女は前代より高尚な使命を受け継いでいる
女の子に正しい恋愛観を体で説くこと
シナズは、女の子と女の子が付き合うことが正しいと本気で思ってる
人の趣味をとやかく言うつもりはない
というか慣れた

（オールベルグってそういうものよね）
既に思考が毒されているが体を許していないからセーフ
現在、オールベルグはチェルシーを入れて四人しかいない
シナズの魔の手から辛うじて逃れているのはチェルシーのみ
クビョウは犠牲になったのだ
ライラは同意の元だったそう
のらりくらり（全力で）チェルシーはやり過ごしてきた
だが、この間、ブラックマリンを届けたとき押し倒された
血の気が引いた
じっくり攻め落とす予定だったレオーネが殺されたので、チェルシーは生きているうちにさっさと食ってしまおうと考えを改めたのだという
嫌いというわけではないが、好き合っていないシナズに初めてを奪われるなど堪ったものではない
暗殺者としての技量とガイアファンデーションを駆使して逃げ切った
仲間から逃げるとはおかしな話だ
暫く気まずくて戻れない
戻ったら今度こそ食われる

暗殺者の勘がヤベェと告げている
「悩み事か？」
心配してるんだかしてないんだか分からない表情でアカメは肉を食らう
アカメは会話中でも食べる手を一切緩めない
こっちにも慣れた
シナズより全然可愛げがあるじゃないか
口いっぱいに食べ物詰め込んでリスみたいとアカメの頬を突く
「うん。ちょっと同僚が変人でさ……」
嘘は言ってない
本業（オールベルグ）も副業（使用人）も同僚が変人なのは変わりない
宮廷の変人共は接点が少ない分、気が楽ではある
（あれ？本業が一番面倒じゃない？）
オールベルグを抜けて宮廷で働く人生も悪くない気がしてきた
革命が成功しても使用人に罪はないのだから裁かれまい
「そーいや。今日はクロメちゃんいないんだね」
いつもならそろそろ背筋に悪寒が走る頃合いなのだ
いたらアカメの頬を突いたところあたりで殺意が爆発してる

考えてて悲しくなるチェルシーであった
「部隊に帰還してる。なんでも作戦会議らしい」
「あー……、大変だね」
チェルシーは理解した
クロメはアカメを食べるために思考を巡らせているのだと
アカメに抱く同族意識
同じくケダモノに目を付けられている
アカメはケダモノに狙われているという自覚はないが、同じ立場の人間がいるというだけで救いになる
チェルシーの今の生活でアカメが唯一の癒しだ
口一杯に料理をかき込むアカメのまた頬を突く
アカメは抵抗せず擽ったそうに眼を細める
（デート!?デートなのね！）
空耳が聞こえた気がするが忘れよう
※　※　※
「来るぞマイン！」
「言われなくても分かってるわよ！」

普段、いがみ合っているタツミとマインは仲がよろしくない
しかし、犬猿の仲でも護るものが一致した今だけは共同戦線を張ることにした
ブラートとレオーネが抜けた今、誰が奴を止める？
自分達だ
自分達が護るのだ
シェーレの貞操を！
……馬鹿じゃねぇの
深く考えると首を吊りたくなる状況なので二人は深く考えず、しかし、真面目に馬鹿の撃退を考えていた
相手は、馬鹿といってもブラートの抜けた今、ナイトレイドで最高戦力に当たるシナズ
オールベルグの頭領である
頭領なのに病人襲おうとか頭どうなってるのか知りたい
流石に、帝具は使わないようだが、『蠢くもの』くらいは使ってくる
というか、殺意高い
何故か、タツミに対してだけ
兄貴と筋トレしていなければ五回は死んでる

特に理由のない暴力でラバも死んだ（死んでない）
タツミの頬を汗が伝う
病人の貞操を狙うために仲間を取りにくるなんてなんてクレイジーウーマン
ただ、女にモテそうという理由で敵視される理不尽にタツミは慄く
汗が落ちる
「そこだッ！」
「狙い撃つ！」
タツミは剣（蝿叩き）で影から忍び寄っていた虫を潰し
不規則な動きで飛ぶ虫に、マインの銃（殺虫スプレー）が火を噴く（火ではない）
危険種である虫は早いが見えていれば敵ではない
問題は数の多さと、シナズが格上であること
『蠢くもの』をけしかけて悠々と歩いていたシナズが加速した
その速さにマインはついていけなかった
「いけない子」
そう言ってシナズはマインを強く抱き締めた
抱擁だ
骨が軋むほど強い抱擁だった

「は、な、せええええ！」
マインは抜け出そうと、もがくがビクともせず、締め付けはより強さを増す
シナズの顔は下心を隠そうともしていない
正直なところ、マインの生け贄でシェーレが助かるならそれでもいいよな、と思っているタツミだがシナズがマインだけで満足しない可能性を考え、餌（マイン）に食いついている隙をつくことにした
「ぜええええい！」
蝿叩きを両手で握り躍りかかる
なんて絵面だ
シナズは片手でマインを舐め回すように撫でながら、空いた片手に得物を持って迎撃する
蝿叩きとフランスパンは交差する
「フランスパン……だと……!?」
「これでおしまいね」
蝿叩きでフランスパンに敵う訳もなく、フランスパンはタツミの胴を薙ぐ
「ぐ……！」
「タツミィ！」

マインの悲鳴がアジトに木霊する
シュールな光景ではあるが、当人達は真剣である
フランスパンは折れたがタツミは身動きが取れないほどのダメージを負った
シナズが男に容赦などするはずもない
「さて、このままシェーレと一緒にマインも頂いちゃいましょうか」
「え？嘘よね？……誰か助けてええええ！」
身の危機を察したマインは全力で助けを呼ぶ
タツミがやられたときの比ではない声だ
「ふふ、叫んでも無駄よ助けなんて」
「うるさい」
スパンッ！
ナイスフランスパン
惚れ惚れする一閃がシナズの後頭部を打撃する
フランスパンは木っ端微塵だ
流石、ボス！最高記録だぜ！
「ったく、仲間を失ってショックなのは分かるがおふざけが過ぎるぞ」
この馬鹿騒ぎがショックの結果起きたとかレオーネとブラートが浮かばれない

実際、レオーネが死んだことでシナズが暴走したのでレオーネ浮かばれてない無念
しかし、そこはボス
事態を収集する
シナズに一言
「食べ物を粗末にするな！」
えっ、ボスが言う……？
思ったがマインは危機が去ったことを喜んだ
仲間の死を悼んでいる暇もない職場だとかブラックにも程がある
オチというオチはない
強いて言えば、マインはシェーレと一緒に寝て、タツミは廊下で一夜過ごした
マインの一人勝ちだ

結成を斬る！

その日、ナイトレイドに持ち帰られたのはブラートによる吉報ではなく、帝都に潜入している密偵から齎されたブラートがエスデスに殺されたという凶報だった
ナジェンダはシェーレが殺されたと聞かされたときのように取り乱すかと思い、タツミを見る
歯を食いしばり、血が出るほど強く拳を握っているものの敵討ちだと言い出す様子はない
（成長したなタツミ）
ナジェンダは少なからず、ブラートを失った悲しみで勘が鈍っていた
タツミが決定的に道を踏み出すのを止めれなかった
タツミの中に炎が生まれ、燻（くすぶ）る
相手は帝国最強
ブラートを殺した相手
無策で勝てる相手ではない

取り乱すな
今はその時ではない
だが……
（エスデス！お前は俺が必ず斬る！）
憎しみの焔がタツミの心を焦がす
純朴だったはずの少年を正しい道に戻してくれる兄貴はもういない
もし、ブラートの最期に立ち会っていたならばタツミはブラートの熱き魂を受け継いだことだろう
結末は変わったかもしれない
けれど、回り始めた歯車は止まることなく狂いだす
シナズは静観する
タツミが女であったなら止めるなり手を貸すなりしていただろうが、彼は男だ
だから、必要以上に干渉はしない
数週間後、ナジェンダは帝具の運搬とメンバーの補充を兼ねて革命軍本部に発った
その間、ナイトレイドのボス代理はシェーレ
不安がないといえば嘘になるとはナジェンダの談
※　※　※

帝都メインストリート
一人の青年が道を行く
彼の名はウェイブ
地方の帝国海軍で戦ってきた海の男
ウェイブは数少ない帝具使いのため、帝国の特別警察から招集がかかった
間違いなく出世だ
ただ、地元でウェイブの強さは三番目
帝具使いというか肩書を買われただけじゃないかと散々からかわれた
上二人が強すぎるだけで帝具抜きでもウェイブは強い
都会は華やかだが、主婦が護身用か武器を持っているところ、治安が悪いのは本当らしい
その主婦達の視線がウェイブに集まっている
何かやらかしたかと不安になる
活きのいい海産物のせいで目立っていると彼は気付かない
主婦達はウェイブを通報するか相談しているが、彼が警察になるとは思いもしないだろう
集合場所までスムーズに辿り着けたウェイブ

中々に運がいい
まだ見ぬ同僚に心弾ませる
最初が肝心
舐められないように
「こんにちは！帝国海軍から来まし――――
」
「ねえ、お姉ちゃん。チェルシーって人はお姉ちゃんにとってのナニ？」
「チェルシーはただの友達だ」
「トモダチ？トモダチ、友達、そっかー、友達かー。なら、安心だ。死ん――――
」
ウェイブは静かにドアを閉じた
（え？何これ修羅場ってやつか!?）
ウェイブは、部屋を間違えたかもしれないとその場を後にしようとしたが、
すぐ背後に覆面の大男が立っていた
「……」
「……」
しばらく見つめ合い、ウェイブは道を譲った

覆面の大男は一礼し、部屋に入っていった
ウェイブは集合場所が記載された書類を読み返す
特別警察会議室とある
今、拷問官のような趣きをした大男が入っていった部屋で間違いない
（ってことはアレが同僚かよ!!流石、帝都!きょうび海賊だってもっとまともな格好してるわ!!）
というかまじで殺しちゃう五秒前みたいな目の逝っちゃった女の子も同僚ということになる
ウェイブは既にホームシックを起こしていた
都会に出世とか浮かれていた昔の自分を殴りたい気分だ
都会の荒波の前に為す術もなく、メンタルが削られるウェイブだった
覚悟決めて部屋に入り、適当な椅子に腰かける
覆面の大男は何も言わず、ウェイブを凝視してくる
ヤバい娘は虚ろな目でお菓子食べてるし、姉と呼ばれた方は慈しむような目で見てるけど、積み上げられた皿で大食いの印象しか抱けない
ウェイブ君は涙が出そうです
でも、泣きません

こんなことで悲観していたら故郷の姉貴に投げ飛ばされてしまいます
「失礼します！帝都警備隊所属セリュー・ユビキタス！＆コロです！」
バターン！と扉を開け放ち、ビシッと敬礼する女の子
足元の動くぬいぐるみとか、手に薔薇の花束とか気になることはあるが、今度こそまともそうな娘だ
と、油断したのも束の間、手に持った花束を勢いよく振り、薔薇を撒き散らす
「Ｄｒ．スタイリッシュ、準備が出来ました!!」
カッ、その男は堂々と入室する
「第一印象に気を遣う……それこそがスタイリッシュな男の嗜み」
凄く、オカマだった
「アラ！見るからに田舎者だけどアナタなかなかイケメンじゃない！」
しかも、オカマはウェイブを気に入ったようだ
そんなに田舎者っぽいだろうかなど気にしている余裕はなかった
「Ｄｒ．スタイリッシュ」
妹だけを見ていた娘もようやく戻ってきたようで、オカマの名を呼ぶ
もしかしたら、今の今までトリップしていてウェイブの存在に気付いていなかったまである

「はーい、アカメちゃん。これからは同僚なんだし仲良くやりましょうね」
どうやら顔見知りのようだ
表情の変化は殆どなく、表情からは二人がどういった関係かは窺えない
妹の方はまだ戻ってこない
一心不乱にお菓子を齧っていた
「こんにちは」
重い空気の中、濃い面子ばかりの特殊警察、最後の者が扉を開けた
どうせ、この人も一癖あるに決まっている
ウェイブは僻々と挨拶を交わす
「よぉ、よろしくなウェイブだ……」
「ランです。こちらこそよろしくお願いします」
ランはニコっと挨拶を返す
それだけだった
見た目がヤバいわけでもなく
目の奥がヤバいわけでもなく
オカマでもなく
普通だった

（ようやく最後にまともな奴がきた！）
神はウェイブを見捨ててはいなかった
あまりの感動に涙が出そうだ
この後、上司に不意打ちで蹴りを貰うが、それがウェイブの宿命ということだろう
故郷でも大体、そんな感じだった
※　※　※
「さきほどの趣向は驚いたか？普通に歓迎してもつまらんと思ってな」
エスデスは仮面を被り、歓迎としてウェイブ達の腕を試した
ウェイブとセリューは投げ飛ばされたが、クロメがエスデスの仮面を斬り、良しとなった
アカメとしては仮面を被った程度で変装しているつもりなのかとツッコミたくあった
「荒々しいのは慣れてますから」
「寧ろ、ご指導ありがとうございます」
現在、アカメ達はスーツを着用し、宮殿を歩いている
「よし、では陛下と謁見後パーティーだ」
「い、いきなり陛下と!?」

「初日から随分飛ばしているスケジュールですね」
アカメは皇帝がお飾りなのを承知している
謁見は形だけのものであり、実質、大臣への顔合わせである
「面倒事はチャッチャと済ませるに限る」
「それよりエスデス様。アタシ達のチーム名とか決まってるのでしょうか？」
名前なんてどうでもよさそうなものだが、このオカマ、決まってないならスタイリッシュなチーム名を勝手に付けるつもりである
エスデスは笑って答えた
「うむ、我々は独自の機動性を持ち、凶悪な賊の群を容赦なく狩る組織……故に、特殊警察『イェーガーズ』だ」
この日、イェーガーズとナイトレイドの帝国の行く末を掛けた戦いの火蓋が落とされる
いや、イェーガーズとナイトレイドだけではない
もっと多くの、大きな、戦いの、火種となる
それをこの時、予想していた人間はどれほどいただろうか
少なくとも、エスデスはその予感を感じ取って、笑っていた

拉致を斬る！

――――事の始まりはウェイブの土産で皆で食事した事か
”あの”エスデス将軍が「恋をしてみたい」と理解不能の謎言語を発した事か
クロメがアカメと親し気なセリューに殺気を当て姉に窘められた事か
覆面の大男、ボルスの素顔が割と普通だった事か
エスデスが回収し、適格者が見つかっていない鎧の帝具、インクルシオを使える人材を探す『余興』都民武芸試合を開催することと相成った
腕試しのためだったり、賞金目当てだったり、目的は人それぞれだったが結構な人数が集まった
「キエエエエエ!!」
「シャアアアア!!」
始まってみれば欠伸が出るほど退屈な試合ばかりで、Ｄｒ．スタイリッシュやアカメ
クロメは警備という名目で早々にどこか消えてしまった
エスデス自身も冷めた目で消化試合を眺める
エスデスも分かってはいたが、インクルシオほどの帝具を使いこなせそうな人間など

容易く見つかるものではなかった
さて、どうしたものかと考えに耽っていると試合も最後の組み合わせとなっていた
東方からは肉屋のカルビ、あれは人間ではないだろう
西方から出てきた少年、鍛冶屋のタツミ
鍛冶屋というのは嘘だがエスデスがそれを知るよしもない
肉屋は態度がデカいがそれは自信に裏付けられたものだ
普通に強い
だが、注目するほどの魅力はなかった
対する少年は肉屋の威圧をどこ吹く風と流していた
試合が始まる
肉屋が先制で仕掛ける
その拳の威力はリングを砕くほどの威力があった
少年はそれに脅威を感じることなく適切に対処する
少年の回し蹴りが肉屋の顔を捉えた
肉屋の意識は途切れた
体格差のある相手を圧倒して倒してみせた少年は観客からの声援に嬉しそうに無垢な笑顔を見せた

これを見てエスデスは胸に滾るものを感じた
ああ、これを探していたのだ
焦がれていたのだ
「見つけたぞ」
そこからの展開は早かった
その怒涛の展開に着いていけた人間はどれほどいただろうか
「今から……私のものにしてやろう」
「……え？」
試合が終わったリングに降りて、エスデスは褒美と言ってタツミに首輪を付けた
その上、所有物になれと言って抵抗するタツミの意識を狩り、宮殿に持ち帰った
エスデスの行動は、あり大抵に言えば拉致だった
何がどうなっているんだ――――!!?
観客席で事の顛末を見届けたラバックの叫びに答えをくれる者はいなかった
※　※　※

「という訳でイェーガーズの補欠となったタツミだ」
どういう訳だと声高々ツッコミたいところだが、蹴りが返ってきそうなのでウェイブは黙っておいた
タツミは首輪をつけられ、椅子に縛り付けられている
被告人(エスデス)は”愛しくなったから、無意識にカチャリと”と供述している
ランにペットと恋人の違いを出すために外されてはと提案されて、タツミは解放された
「そういえば、このメンバーの中に恋人がいたり、結婚している者はいるか?」
「えええええええええええええええ!!?」
手を挙げたのはボルスとクロメ
ボルスが手を挙げたということにウェイブとセリューが驚きを見せる
アカメはクロメが手を挙げていることに気づき、小刻みに震えている
「クロメに彼氏……?そんな、何時の間に……?クロメ、私に紹介してくれないか?クロメに相応しい男か斬り合って……」
「落ち着けってアカメ!物騒だぞ!?」
「私は落ち着いている。クロメが世界で一番可愛いのは分かっている。下劣な男がクロメを放っておくはずがない。だが、私より弱い男にクロメを任せるつもりはない」

やっぱり、アカメとクロメは姉妹なんだなとウェイブは思った
ヤバい目をしていやがる
村雨の刃も心なしか、いつもより妖しく光っている
「危ないのでここで村雨を抜かないでください」
ランはさりげなく距離をおいていた
「やだなぁお姉ちゃんってば。私の恋人はお姉ちゃんに決まってるじゃん」
アカメがヤバいことになっていると思ったら、クロメはもっとヤバいことを言い始めた
目が笑っていないというか
底が見えない
覗けば最後引きずり込まれそうな闇を宿している
やだこの姉妹怖い
「戯言は放っておくとしてだ。ボルス」
流石、エスデス将軍
いかれた姉妹を見ても小揺るぎもせんわ
「はい……結婚六年目です！もうよく出来た人で私には勿体ないくらいで！」
覆面で顔が隠れているのに乙女な表情をしているのが分かる

外見と内面のギャップが凄い
和やかな会話が続く中、タツミの内心は穏やかではなかった
隙を見て、逃げ出さなければという理性と、兄貴を殺したエスデスに対する殺意が鬩ぎ合っていた
「……」
スタイリッシュとアカメは何も言わない
「さて、早速だがお前にプレゼントだタツミ」
「これ……は……？」
「帝具『インクルシオ』だ。タツミなら使いこなせると信じているぞ」
タツミはエスデスに手渡された剣に顔を落とす
市民である少年がいきなり宮殿に連れてこられただけで大変なことなのに、その上に帝具を渡されたとあったら戸惑うのも無理はない
ウェイブはそこはかとなく親近感を覚えた
「隊長が悪を処刑して手に入れたんですよ」
「……」
セリューの声が聞こえいているのかいないのか
俯いているせいでタツミの表情は見えない

勝ち組になれる歓喜か
希少な武具をポンと渡された困惑か
震える声音でタツミは帝具に呼び掛ける
「来い、インクルシオ……！」
屋内に一陣の風が吹いた
どこからか突如現れた鎧がタツミの体を覆われていく
帝具は理を越える法外の武装
今更驚くことでもないが、千年経った今でも帝具を越える武具は産み出されていない
鎧はタツミの体に合わせて形を変えていく
「おお！」
「あら、大当たり」
ウェイブとスタイリッシュが感嘆の声を漏らすのに対してエスデスは当然だとばかりに見守っていた
「……これがインクルシオ」
装着が完了した
常人なら身に纏っただけで絶命する
タツミは調子を確かめるように手を閉じて開く

この様子ならタツミはインクルシオに適合したとみて良さそうだ
「気分はどうだタツミ?」
「あぁ、ーーー!!」
タツミはエスデスをインクルシオで増強された力の限りを尽くして打撃した
殺ったと確信した
完璧な不意打ちだったと自負している
殺気もギリギリまで出さなかった
だが
「いい拳だ」
タツミの拳が捉えたのは氷の壁だ
帝国最強には届かなかった
エスデスはタツミの殺意に気付いた訳ではない
ただ、戦士の勘が防御せよと告げた
それだけだ
「それでこそ染め甲斐があるというものだ」

脱出を斬る！

エスデスの殺害が失敗したタツミの行動は迅速だった
宮殿内を下手に動くのは危険だと承知しているがイェーガーズの面々に嬲り殺されるよりはマシだと脱出を試みる
タツミは最後まで生き残ろうと足掻くことにした
「タツミを殺すな！生きたまま捕らえろ！」
「「了解！」」
そして、イェーガーズの動きもまた迅速だった
エスデスに攻撃した瞬間からアカメとクロメ、そしてセリューはタツミにそれぞれの武器を突き立てんと動いていた
タツミはイェーガーズの待機所からも出ることは叶わない
……筈だった
イェーガーズ全員の意識が逃げ出すタツミに向いていた
その中に狙い澄ましたように爆弾が放り込まれた
しかし、イェーガーズの全員が実力者

瞬時に爆弾が投げ込まれたことを察知し、回避行動に移る
それこそ投げ込んだ者の思う壺と理解していながら、タツミから意識を逸らされた
エスデス以外は
「逃がさんぞタツミ!」
爆発した
同時に窓が割れる音がした
※　※　※
ボルスは頭を守るように腕をクロスし、足を踏ん張り衝撃と爆風による熱気に耐えてみせた
セリューはコロを巨大化させることでスタイリッシュと自身の身を守った
ランは帝具『万里飛翔マスティマ』の翼で自身を爆風から守った
アカメはテーブルを盾にするように立てて、テーブルで殺し切れなかった余波をクロメが骸人形のウォールでカバーした
エスデスは見向きもせず、氷の盾を置いた
爆弾如きで負傷するようなメンバーはイェーガーズにはいない
ウェイブが顔面から壁に叩きつけられているがアレはノーカン
丈夫なのだから大事には至るまい

爆発の影響で煙がたち籠もる待機所を颯爽と抜けるイェーガーズの面々
しかし、インクルシオを纏ったタツミの姿がないことに眉を顰める
一瞬、視界から外した間に隠れたのか
否だ
「インクルシオには透明化する能力があるようだな」
エスデスだけが爆発の最中、タツミを見失わなかった
透明化するところをその目で目撃していた
宮殿内で暴れればブドーが駆けつけるし、宮殿内は罠だらけ
下手に逃亡しようものなら命の保証はない
だが、頑丈な鎧を着こんでいるタツミだ
死にはしないだろう
エスデスが追跡を始めた
「クソ……ッ！」
エスデスの読み通り、罠などものともしないタツミだが、とても冷静とは言えなかった
イェーガーズが自分を追ってきている気配をひしひしと感じる
そのプレッシャーに悪手を選んでいることに気付けない

罠は足止めにならないが、タツミの居場所を伝えるには十分すぎる働きをしている
罠が作動していることを不審に思いながら透明化しているタツミに近衛兵は気付くことは出来ない
彼等を素通りして最短で宮殿を脱出しようと駆けるタツミ
だが、間が悪かった
大将軍と鉢合わせてしまった己の不運を呪え
帝国の守護神の怒りを買った我が身を憎め
「――――アドラメレク」
「がああああああああ!?」
宮殿内の戦闘の空気を感じ取った大将軍ブドーは独りでに作動する罠を見て、即座に雷撃を叩き込んだ
斯くして、姿を消しているタツミに雷神の鉄槌が下る
鎧ごしに高電圧を受け、体の自由を奪われた
「嘘……だろ……?」
そのたった一撃でインクルシオは解除された
インクルシオの鍵と共にタツミは大の字で転がる
「こんなところで……俺は……!」

終われない
だが、意志とは裏腹に指一本動かず、意識は薄れていく一方だ
もっと、経験を積んでいたのなら『雷神憤怒アドラメレク』に耐えれたかもしれない
それは”たられば”のナナシでしかない
無常にも、地に伏す少年の前に処刑人が立つ
「陛下の宮殿を荒らす者は私の帝具が裁く」
「させるものか……！」
侵入者にトドメを刺そうと構えるブドー
させまいとタツミを氷壁で守ろうとするエスデス
どちらが早いかでタツミの命運が決す
憐れ、囚われの少年の命運は
「おっと、今時の若者は随分と物騒じゃねぇか」
第三者の手に委ねられた
乱入者はタツミを守る氷壁を砕き、ブドーの雷撃を落ちていた剣（インクルシオの鍵）で叩き落とした
無骨な見た目に反して、余りにも鮮やかな手並み
エスデスも、ブドーも呼吸を忘れた
この男どこから現れた？

いつ剣を拾い、いつ割り込んだ？
「おじさんも混ぜてくれや」
エスデスもブドーも感じていた
新手の男は強者である
ブドーは最大限の警戒を、エスデスは最大限の歓喜を持って、侵入者と相対する
※　※　※
「憤ッ！」
「遅ぇ遅ぇ。本調子じゃねぇなお前？出直してこい」
雷撃を纏った拳を掻い潜り男はブドーに掌底を叩き込む
「凍れ！」
「温ぃ！」
足元の冷気をインクルシオの鍵で捩じ伏せる
ブドーは体勢を立て直し拳を振り下ろす
一歩下がり、足元の剣を蹴り上げ、男は無理な体勢からブドーの拳を受け流す
「アドラメレクッ！」
交わった剣にすかさず、電流を流し込む
仕留めきれるとは思っていない

剣を伝って電流が男の動きを鈍らせれば、それでよい
「これをどう止める!?」
エスデスの氷塊が侵入者の頭を砕かんと迫る
「こうやってだ！」
獰猛な笑みで男は逆に頭突きで氷塊を割る
しかし、氷塊は目眩まし
エスデスの本命の回し蹴りがくる
男はそれを見てから、対処した
ブドーの拳を受け流した剣の腹をエスデスの蹴りに合わせて受ける
受けるだけに留まらず、蹴り込む勢いを利用して後方に下がる
その際、足元に転がるタツミの回収も済ませていた
帝国最強である二人を相手にここまで立ち回って見せる相手がいるとは
ブドーは表情を厳しく、エスデスはより愉しげになっていく
「やっぱ、拾った剣（インクルシオの鍵）じゃ駄目だな。命預けるなら使い慣れた得物じゃねぇとな。滅茶苦茶痺れたぜ」
イェーガーズの面々は突発的に起きた戦いに着いていくことが出来なかった
下手に手を出せば足を引っ張ることになりかねない

爆撃から復帰したウェイブは生唾を飲んで見ていることしかできなかった
この三人は明らかに格が違う
「さて、デモンストレーションはこれくらいでいいだろう」
男は突然、構えを解いた
エスデスとブドーは怪訝な顔で男の真意を探る
「よぉ、聞いて驚け！俺の名はアンノーン！知る人ぞ知る御伽噺の大悪党様だ！」
男は高らかに名乗りを上げると、懐から取り出した球体を地面に叩きつける
衝撃で球体は割れ、途端に煙が宮殿に広がる
「煙幕？逃げる気か」
愉しい闘争を途中で放棄されたことで興を削がれたエスデスはつまらなそうに吐き捨てる
当然、逃がすつもりはない
ブドーは煙幕に紛れての奇襲を警戒して――――痺れを感じた
これはただの煙ではない
エスデスは軽い痺れを感じる程度で済んでいるがブドーはそうでもないらしく、膝をついていた
耐性がないのに膝をつく程度で済ませているのは大将軍だから成せる力技か

「貴様ぁ！神聖な宮殿で毒ガスを使ったなッ!!」
「おいおい！おじさんは大悪党だぞ？それくらい当然だろうが」
戦闘音を聞きつけ、何事かと集まっていた野次馬が次々と倒れていく
この程度の毒に倒れる弱者など知ったことではないとエスデスは男を追おうとして違和感を覚える
先ほどまで戦っていた男の顔が思い出せないのだ
「力なき者よ我を恐れよ。力ある者よ我に挑め」
その言葉を最後に男の声は聞こえなくなった
「どうなっている……？」
煙を払ったところで追いかけるべき男の姿とタツミの姿はなく、インクルシオの鍵が地面に突き付けられているだけだった
※　※　※
正体不明（アンノーン）の男が逃げ去った後、スタイリッシュが倒れている人間を診た
意識を奪う神経ガスで命に別状はないとのことだった
ただ、しばらくは寝たままらしい
賊の侵入を許しただけではなく、見逃したといっては流石のブドーも黙っていられないのか

警備の強化と賊の討伐に向かった
対して、エスデスは思考に耽る
インクルシオの鍵を置いて去ったのは何故だ
賊が危険を冒してまで市民であるタツミを連れ去ったのは何故だ
賊の顔を思出せないのは何故だ
タツミが帝具を纏った途端に襲ってきたのは何故か
「分からんことが多いな」
※　※　※
一方、イェーガーズの待機所に爆弾を投げ込んだと思われる男を発見したが既に事切れていた
生きていたとしても大した情報を持っていなかったに違いないが
その男は体の内側から虫に食われて絶命していた
この手口をアカメは知っている
「オールベルグ」
これで確定
タツミは革命軍の一員だ
救出までが異様に早かったが、それだけタツミは重要な役割を担っているのか

考えても仕方ない事だ
次に会えば敵同士
男の体から這い出た虫を死体事、ボルスの帝具『ルビカンテ』の火炎放射が焼き殺す光景を見ながら思い出す
かつてアカメに帝国の闇を教えた敵オールベルグの頭領メラ
あの女も強かったが、エスデスとブドーの前に現れた男は文字通り次元が違った
まともにやり合えば勝てない相手だった
革命軍との戦いが激化していくことを感じ取った
※　※　※
オールベルグの女、チェルシーもまた予期せぬ事態に混乱していた
宮殿に出入りしている適当な男を捕まえて虫を埋め込み、脅し、爆弾を待たせたシナズ
オールベルグとしてタツミの脱出の手助けは捨て駒を使ってイェーガーズの待機所に爆弾を放り込む
それだけだった
深く介入するとチェルシーの潜入が明るみに出る危険性があった
手助けはしたが、タツミは再び囚われるとチェルシーは踏んでいた

しかし、結果はどうだ
顔も知らぬ男が、帝国最強の双璧をいなして逃げおおせたのだ
想定外だが喜ばしいことだ
タツミを助けたのが味方であれば、だ
タツミを助けた男、アンノーンと大声で名乗っていたか
その男の顔が全く思い出せない
インパクトのない顔だったというわけではない
記憶に靄がかかったような感じだ
どういう手品かアンノーンは自分の顔を相手の記憶に残さないらしい
「でも、アンノーンか。御伽話の大悪党じゃん」
帝国に伝わる御伽話の一つに登場する大悪党アンノーン
”悪さをするとアンノーンが食べにくるよ”
悪さする子供を嗜めるのによく使われる言葉だ
チェルシーも詳しい話は知らないがアンノーンは大昔に帝国で暴れた実在した人物だという
曰く、その姿は女だったり、老人だったり、狼だったり、腕が六本ある化け物だったり、山くらいある巨人だったりと伝える姿はバラついていて統一性がない

帝国を恐怖のどん底に叩き落とした正体不明の殺人鬼アンノーン
漠然と神出鬼没の悪い殺人鬼だというくらいしか分からない
だが、彼が生前に残した言葉がある
”力なき者よ我を恐れよ力ある者よ我に挑め”
あの男が逃げる前に残した言葉と一致していた
「アンノーンに憧れる変人か」
敵か味方かはっきりしない手合いが一番面倒だとチェルシーは知っている

初任務を斬る！

ランとしてはイェーガーズはこの上なく良い職場になるだろうと予感していた
同僚の条件も文句の付けようがない
ウェイブは正義感の強い青年だ
事情を話せば分かってくれる
ボルスは職務は全うするが善良な人間だ
彼に勘づかれないよう秘密裏に事を推し進めるべきだろう
Ｄｒ．スタイリッシュは都合がいいから帝国に付いているだけで愛国心など微塵も持っていない
アカメは帝国に叛意を持っている
最愛の妹という枷を外してやれば彼女は帝国を変えるためにその力を振るう筈だ
クロメは厄介だが情報では薬の副作用で長くない
持って一年といったところか
セリューは無力化する手札を持っている
破綻している正義は脆い

最後にエスデス
戦狂いのエスデスはランの目的の為にどうしても邪魔になるだろう
しかし、部下想いの良き隊長だ
彼女の機嫌を損ねないように立ち回れば帝国を内部から変えていくのは難しくない
ああ、自分は恵まれている
ランはほくそ笑む
本懐である復讐もきっと上手くいく
※　※　※
「失礼、先程の騒ぎで使用人が相当数が使い物にならなりましたので少し仕事が滞ると思われます。失礼ですが了承ください」
「ええ、承服していますよ。部下が大勢倒れて大変でしょうに、態々報告ありがとうございます侍女長」
「いえ、仕事ですから。私はこれで仕事に戻ります。失礼」
侍女長が大臣の執務室から退室する
その様子を見届け、姿を隠していた羅刹四鬼が現れる
侍女長が羅刹四鬼の存在に勘づいていたのは百も承知だが恰好ｄけでも付けておくものだ

「アンノーンだかアンコウだか知りませんが、〝私〟の宮殿を土足で踏み荒らすとは許しがたい……！ストレスで食べる量が増えてしまいますよ！」
大臣は山盛りのたこ焼きを絶え間なく口に運ぶ
美味である
ストレスがなければもっと美味であったことだろう
全く忌々しい
ブドーとエスデスがいる宮殿に忍び込み、あまつさえ脱出までしてみせるような駒が革命軍にある
これではキョロクに自身の護衛である羅刹四鬼は送れない
さて、どうしたものか
「ねー、大臣。なんで使用人なんかの御機嫌窺いしてるの？」
羅刹四鬼の一人、褐色色の肌をした少女メズはずっと気になっていたことを大臣に問う
雇い主である大臣に対して敬語ではないのは今更なので注意する気も失せている
そんなことすれば無駄にカロリーを消費して、食べる量が増えてしまう
「使用人なんかとはなんですか。彼等のおかげで帝国は続いているのですよ」
「なにそれ大袈裟」

冗談だと受け取りメズは笑うが、筋肉の鎧でおおわれている男シュテンは大仰に頷く
「大袈裟など有り得ん。あれは羅刹四鬼全員でかかっても敵う相手ではない。あれほどの者が何故、使用人をしているのか疑問ではあるな」
羅刹四鬼の中で一番若輩であるメズは仕方ないが、他の三人は違う
あの侍女がずっと己等の存在に気付いて、その上で触れてこなかったことを知っている
「流石はシュテン殿ですな。侍女長が何故、侍女をしているかは私も知りませんが、どうやら私より遥かに長生きしているそうですぞ」
「長生き？私とそう変わらない見た目だったけど」
体に生傷を無数に作っている女スズカは侍女長の姿を思い浮かべ言う
本心では侍女長とエスデス将軍に見下されるのならどちらの方が興奮するか真面目に考察する変態である
あれが大臣より歳上とは、大臣は実は二十代だったということか
「侍女長は私が幼い頃からあの見た目ですよ」
「嘘だー！」
「嘘ではありませんよ。実力に関してもあのエスデス将軍に底が見えないと言わせた程です」

エスデスは侍女長を一目見て強者を認め、挑んだ
当時、不意打ちを顔色一つ変えず対処してみせた侍女長に驚いたものだ
戦いは拮抗していたようにオネストには見えていたが、戦っていた当人であるエスデスは〝遊ばれていた〟と悔し気に語った
そんな侍女長はエスデスのことを〝まだ伸びる余地がある危険な方〟と評価していた
「帝国最強にそこまで言わせたのかあの女……惚れちまいそうだぜ」
羅刹四鬼の中で一番の実力者イバラが頬を染める
この男、いつもなにかに惚れている
ちなみに羅刹四鬼最強ではあるが実力は僅差である
「手出し無用でお願いしますよ。侍女長を敵に回したら私は簡単に殺されてしまうんですから」
侍女長一人でも過剰戦力だというのに部下として『シルバーブレット』という部隊を隠し持っている
殺しのエキスパートで構成されており、噂では『殺戮人形』と呼ばれるほど慈悲がないのだとか
侍女長と執事長では権限は対等でも、武力で侍女長が圧倒的に優位である

そもそも、執事長は侍女長と張り合うつもりなど更々ない
侍女長を敵に回すということは、帝国の上空を守護する危険種の主である執事長も敵に回すことになる
そうなれば、大臣に勝ち目などあるまい
エスデスはこちらに着くであろうが、ブドーは侍女長には強く出れないのだ
侍女長の目的は一貫しており、『帝国の存続』を守る限り、国が腐ろうと、民が貧困に喘ごうと、牙を剥くことはない……筈だ
彼女の機嫌を損ねれば最期、大臣の長生きの夢は潰えるのだから
大臣は侍女長に細心の注意を払って接している
※　※　※
夢を見た
サヤとイエヤスに置いて行かれる夢だ
いくら走ろうと
いくら手を伸ばそうと追いつけない
二人の背中は見えなくなった
姐さん（レオーネ）が立ち止まる自分の肩に手を置く
姐さんはニカッと笑って進む

待ってくれと叫ぶが手をヒラヒラさせて振り返りもしない
老い変えようとしたときには、蜃気楼のように姿を消していた
それでも走り出した
この後、誰が来るか分かっていたから
予想した通り、兄貴(ブラート)が背後から追い抜いていった
諦めるもんかと走るがその背中は遠のいていく
走りながら兄貴は振り向いて何かを言った
しかし、遠すぎてか聞こえない
もう一度言って欲しい
もっと近くで
俺を導いてほしい
だから、
「――――待ってくれよ兄貴！」
「お、やっと起きたか坊主。あんまりにもぐっすり寝てるもんだから死んでるんじゃねぇかと思ってたぜ」
「ハァ……、ハァ……？ここは……俺は……？」
タツミは目を覚ました

荒れる呼吸を整えようとして気付く
気を失う直前、自分は死に鉢合わせていたはずだ
ということはここは死後の世界だろうか
天国は古びた小屋で、髪が緑の中年男性が髪だろうか
「安心していいぜ坊主。ここは帝都の外だ。おじさんの勘だと追手もねぇさ」
男の言葉から自分があの状況から助かった
というか助けられたのだと知った
ここは天国ではなく普通に古びた小屋らしい
……胡散臭い男の言葉を信じればの話だが
「アンタが俺を助けてくれたのか？」
「その認識で合ってる。坊主は、あそこで終わらせるに惜しい逸材と思ってな。ああ、礼は要らねぇぞ。目的のついでだったからな」
「……なんかよく分かんねぇけど、ありがとうございます……えっと？」
信じるにしても疑うにしても情報が足りない
それに目の前の男をなんと呼べばいいのか困った
窮していたタツミに気付いた男は助け船を出す
「おじさんでいいぜ坊主。それと、礼は要らねぇって言ったろ？」

「すいません……」
「ここからは自分で帰れるよな？おじさんはここいらでお暇するぜ」
「あっ、はい」
よっこらせ、とおじさんは立ち上がり、小屋を出ようとする
怪しい男であったが別に留める理由もなし、最後に礼を言おうとするが礼は不要と言われていたので口を噤む
「ああ、それとおじさんからのアドバイスだ」
思い出したようにおじさんはタツミに振り返り言う
「寝言は気を付けろ」
全然、死んだように寝てないじゃないか
突っ込む前におじさんは二つ目のアドバイスをタツミに送る
「復讐心なんかでお前の魂を曇らせるな。貫き通す覚悟があるなら文句は言わねぇが、坊主はそうじゃねえだろ？」
「ッ！」
タツミに衝撃が走る
復讐心
ああ、そうだ

兄貴を奪っていったエスデスが憎い
直接的ではなくとも姐さんを奪っていったエスデスが憎い
サヤとイエヤスを奪っていった帝国の腐敗が憎い
ああ、確かに自分の心は憎しみに囚われていた
言いたいことだけ言っておじさんは立ち去った
タツミはおじさんに送られた言葉を噛み砕く事に集中していて、見送ることはなかった
復讐心で魂を穢していたなんて自分はなんて大馬鹿野郎なんだと己を恥じた
自分には兄貴の魂（インクルシオ）を継ぐ資格はない
と思ったところで思い出す
「……インクルシオは？」
時すでに遅し
おじさんのいた痕跡は跡形もなく消えていた
※　※　※
エスデスはキョガン湖の高所より”狩り”を観察していた
狩り人はイェーガーズの面々
獲物はギョガン湖周辺に巣を張る犯罪者共

噂では革命軍と繋がりがあるらしい
真偽は兎も角、賊に変わりはない
弱者は淘汰されるのが世の常
碌に情報を持っていないと判断し、皆殺しと命じた
セリューは悪人を有無を言わさず殺せると喜んだ
ボルスは誰かがやらねばならない汚れ仕事と受け入れた
アカメとクロメはただ命令を実行するのみと言った
ウェイブは恩人に報いるために命も張る覚悟を持っている
ランは出世のために手柄をどんどん立てるとやる気を見せた
スタイリッシュはよく分からん
だが、皆迷いがなくて大変結構
これはイェーガーズ初の大仕事だが、展開は一方的の一言に尽きる
イェーガーズが悪党共の駆け込み寺の殲滅に取った作戦は”正義は堂々と正面から”
数という点だけ見れば少数であるイェーガーズが不利だが、皆揃って精鋭
策を用いるまでもないということだ
まずはセリューがわらわらと出てきた雑兵を蹴散らし、門を破る突破力を見せた

見事な殲滅力だ
セリューの兵装はスタイリッシュの手製らしい
破った門からアカメとクロメが先行
粛々と命を刈り取る
ウェイブが二人に遅れて付いていく
ボルスは飛んでくる矢ごと賊を燃やす
火炎放射器の帝具『煉獄招致ルビカンテ』の炎は相手を燃やし尽くすまで消えることはない
ランは翼の帝具『万里飛翔マスティマ』で逃走を始める賊を上空から羽を飛ばし漏れなく殺す
一方的に繰り広げられる蹂躙を見下ろし、エスデスは部下の実力を評価する
ウェイブは師に恵まれたようだ
あの若さでその強さは完成されていた
しかし、完成されていてこれ以上、手を出すことはできない
セリューは逸材だ
教育のしがいがありそうだ
クロメはアカメと同等の実力があるようだが、それは薬で無理矢理ドーピングをして

いるだけだ
底が見えなかったのは薬を使っていなかったからか
薬を使ったクロメは底どころ末まで晒している
エスデスは薬は好まない
クロメも真っ当に訓練していれば、アカメと同じ屈強な戦士になっていたに違いない
可能性を殺すとは、帝国の上層部は惜しいことをしてくれたものだ
大臣に文句を言っておくとしよう
アカメのキリングスコアがトップだ
帝具の性能に頼ることなく、確実に致命傷を与えて殺している
アカメはイェーガーズで一番の実力だと見ている
その上、まだ伸びしろがある
それにアカメはきっと自分の同族だ
万が一敵対することがあれば――――
「――――逃げたか」
エスデスはあらぬ方向に視線を向ける
そこから二つの気配が消えていた
※　※　※

革命軍の密偵である女二人が全速力で森を横断していた
女性一人を抱き抱えて尚、帝具『韋駄天足ソニックロード』によりその速度は亜音速に達している
抱かれている方の、半目の女エンプティは気怠そうに声を出す
「はぁ……、思ってた……使い方とは……違ったけど……結果おーらい……」
ギョガン湖に小悪党共のアジトを築かせたのは他でもない
革命軍だ
帝都近郊の小悪党共を集めて統率するのは革命軍の工作員
革命軍が山賊などの屑を一ヶ所に集めて飼っているのは、使い潰しても良心が痛まない捨て駒が欲しかったからだ
帝国はギョガン湖のアジトを見逃すと踏んでいた
山賊共の吹き溜まりを労して潰しても旨みはない
帝国のために損しようとする物好きはいまいとカタを括っていた――――帝国の兵士がギョガン湖を嗅ぎまわり始めるまでは
工作員は帝都で最近結成された特殊警察イェーガーズが駆り出されるのでは、と当たりを付けていた
ドンピシャだ

イェーガーズは革命軍のナイトレイドと同じく、全員が帝具使いとの噂がある
向こうから来てくれるのだ
山賊で威力偵察をするほかあるまい
最悪全滅しても失うものは少ない
「それで私達はこれから何をすればいいんっすか先輩!?奇襲っすか!?」
涼しい顔で走り続ける少女ラビは大声でこれからの方針を問う
「五月蠅い……、眠い……、手出し無用……。私達は……密偵チームだし……」
そもそも、エスデスは遠くから覗き見していたエンプティとラビの存在に気付いていた
気付いて見過ごしていた
そんな化け物に奇襲など無意味も甚だしい
二秒で返り討ちに会う
「で!どこに行くっすか!?」
「はぁ……、本部……、ナジェが……来てるみたいだし……」
エンプティはイェーガーズと戦うことになるナイトレイドに情報を売るべきだと考える
あと、自分に代わり報告してくれたら面倒が減って嬉しい

戻って確認するまでもなく、キョガン湖周辺の悪党共は一人残らずイェーガーズに狩り尽くされた

侵入者を斬る！（前半）

彼はいつから人の命を研究の材料としか思わないようになったのだろうか
本人も覚えていない
道を踏み外したスタートラインは覚えている
今では黒歴史だが、彼は初めからスタイリッシュな科学者だったわけではない
真面目に面白味もスタイリッシュさもない研究者だった
彼が決定的な転機を迎えたのは、『至高の帝具』の存在を知ってからだ
『至高の帝具』を知ってスタイリッシュは思った
なんてスタイリッシュなの！
こんなものを自分も作ってみたいと欲望を抱いた
たとえ、人の道を外れることになろうと
分を弁えない科学者は夢を見る
これがＤｒ．スタイリッシュの原点
スタイリッシュが道を踏み外した始まりの地点
だから、スタイリッシュは感謝している

『至高の帝具』を見せてくれた侍女長ダスクに
あの女と自分
どちらの方がイカれた狂人だろうか
※　※　※
イェーガーズの面々が寝静まった深夜
スタイリッシュの靴の音だけが廊下を木霊する
「！」
スタイリッシュが夜に抜け出すのを始めから分かっていたようにアカメは立っていた
闇夜に紛れて現れるアカメは味方と分かっていても背筋が震える
味方であっても、自分と同じ狂人だからこそアカメは恐ろしい
「どこに行くドクター？」
「どこって、アタシの研究室よ？」
「強化兵を率いてか？」
紅色の目がスタイリッシュを捉えて離さない
見え据えた言い訳をアカメは許さない
ただ、この程度の威圧で怯えるようならマッドサイエンティストなどやっていない

「んもう、分かってるんでしょう？言わせないでよ」
「ーーーナイトレイドのアジト、か。まさかタツミがナイトレイドだったとは……」
「この事はアカメちゃんとアタシだけの秘密よ。〝あの事〟もあるものね？」
「……わかっている」
「ありがと。アカメちゃんからの依頼は順調に進んでるわよ。今は〝前金〟の子達に試作品を投与して経過を見てるところ」
「……」
イェーガーズとして同僚になる前からアカメと面識があった
アカメはスポンサーの一人だ
やりたい実験は無限にわいてくる
それに対して死刑囚だけでは数が足りないし、質もよろしくない
困っていたスタイリッシュにアカメの依頼はありがたいものだった
依頼の内容は〝暗殺部隊が服用している薬の副作用の無効化〟
報酬は〝暗殺部隊のメンバー〟
歓喜のあまり二つ返事でＯＫを出してしまった
暗殺部隊のメンバーは粗悪な薬の副作用で体はボロボロだが質はまぁ悪くない
それに妹のために仲間を売るアカメにスタイリッシュを感じたのだ

罪悪感はないわけではないだろうが、後悔も、後戻りするつもりは一切ない目
アカメが男だったならお手付きしていたほどスタイリッシュな在り方だ
「気分がいいから今日は奮発しちゃおうかしら」
スタイリッシュ鼻歌を歌い、歌に合わせて影に潜む駒（強化兵）達も踊る
※　※　※
スタイリッシュが去り、残されたアカメは月を見て何を思うか
「わかっている。私の手は仲間の血で汚れて切っている。今更、後戻りは出来ない。後戻りするつもりもないんだ」
それでも
流れる涙を止める術をアカメは知らない
いくら罪業を積み重ねようと彼女は止まらない
「お姉ちゃんは優しいなぁ。可愛いなぁ。儚いなぁ。尊いなぁ。傷付いても私だけを想ってくれるんだぁ」
一人、涙する姉を影から見守るクロメは優越感に浸る
人前で姉は弱さを見せない
見ていいのは自分だけ
姉の本心を知るのも自分だけでいい

姉を独占していいのは自分だけなんだ
姉が自分のために仲間を切り捨てるように、クロメは邪魔者が仲間であろうと排除する

※　※　※

「おーい！タツミ！こっち来いよー！」
「兄貴……？」
ここはどこだろう……？
兄貴が川の向こうで手を振っている
小屋を出た後、タツミを救出しに来ていたシナズと合流してアジトに帰還したはずだ
それで何があった？
体が勝手に川を渡り始める
何か忘れている
確か……
「……ミ。……なさいタツミ。起きろっての馬鹿！」
「……ハッ！」
「良かった……タツミが生き返りました」
マインのビンタでタツミは目を覚ます

それと同時に記憶が甦った
自分は死にかけていた
仲間の料理に殺されかけていたのだ
「だから、シェーレとライラを台所に立たせるべきじゃなかったんだ……」
二人が料理を作ることに反対していたクビョウは料理に手を出さず、文句を垂れていた
「失礼ですわね。わたくしが間違うとでも？致死量ギリギリですのよ」
毒を入れるのがまず間違えである
ライラは顔色一つ変えず致死量ギリギリの毒入りシチューを口に運んでいた
「すいません。間違えて洗剤を入れてしまって」
シェーレマジやばくね
確信犯ではなく天然の方が質が悪い
「毒が入っていようと洗剤が入っていようと女の子の手料理を残すのは女の恥よ」
シナズは料理を残さない
顔色が悪いのは毒や洗剤のせいか
単純に料理が不味いからか
タツミは最近、「この人、実は馬鹿なんじゃないか」と思い始めている

「ていうかライラとシェーレの合作料理を食べて、アンタよく戻ってこれたわね」
二人の料理を食べて戻ってこれない人がいるみたいな言い方だが分かってて仲間にそんなものを食べさせたのだろうかこの天才（笑）は
「まぁな。故郷で創作料理（ゲテモノ）をよく食わされてたから少し耐性が付いてたんだと思う」
サヨの料理は毒も洗剤も入っていなかったが独特だった
危険種の脳味噌ショートケーキってなんだ
スパイスは愛情とのたまうサヨの笑顔が懐かしい
危険種よりサヨが笑顔で料理を持ってくる方が死を身近に感じたものだ
その度にイエヤスとサヨの料理をどちらが食べるかと争った
結局、二人してサヨに料理は食わされて死線を漂うまでがワンセット
もうサヨの創作料理（名状しがたいモノ）を食えないと思うとライラとシェーレの合作料理が美味しそうに見えるから不思議だ
それでも、食いたいとは思わないけど
「そういや、ラバは？」
「えっ？」
ラバは暗黒物質を口に含み死にかけていた
「ラバアアアア！！」

「ラバは犠牲になったのよ。折角、シェーレが作ってくれたのを残すわけにいかなかったし」
犯人はマイン
「……ッ！」
茶番を見かねたのかクビョウがいきなり席を立つ
「ど、どうしたんだよクビョウ？」
タツミの声は届いていないのか
クビョウの目はどこか遠くを見ているようだった
「何ボサッとしんのよタツミ！敵襲よ！」
「は？どういうことだよ！」
「クビョウは警報器のような機能を持ってるんですよ」
凄いですよねと呑気にシェーレは言う
正確にはクビョウは自身の生命の危機を察知するのであって、相手にならない格下や、クビョウに関心を示さない危険種などには気づけない
「ぐずぐずしてないで動く！」
「ちょ！引っ張るなって！」
マインに手を引かれ、死にかけのラバがシェーレのビンタで強制的に蘇生される中、

タツミは見た
「つけられていた？痕跡は消していたのに？また、私のせいで……」
爪を噛んでぶつぶつと独り言を漏らすシナズと、能面のような表情で飛び出していったクビョウがやたらと印象的だった
オールベルグの三人組の中でライラだけが変わった様子なく迎撃の準備をしていた
※　※　※
「どうやら気付かれたようです」
『耳』がナイトレイドに気取られたことを改造された耳で聞き取りスタイリッシュに報告する
「あら、まだ結構な距離があるのに……やるわね」
気付かれないよう襲撃を仕掛けようとしていたスタイリッシュは悩ましげに腕を組む
「先行したトローマはどうしますか？」
「んー？トローマが気付かれていない可能性はなくもないし、そのまま潜伏させておきなさい。でも、チャンスがあればスタイリッシュに行動するように伝えて」
『歩』の一体が伝令として隊を離れる
「我々はどうしますか？」

「決まってるじゃない。スタイリッシュに侵攻開始よ！」
『歩兵（きょうかへい）』の群れが合図と共に行動を始める
ポージングを忘れないのがとってもスタイリッシュ

侵入者を斬る！（後半）

少し、昔
反国家思想を危惧した帝国は暗殺専門の部隊を設立
無垢な子供達を兵器として育てるプロジェクトを三つ動かしていた
金で帝国に売られた子供をふるいにかけ、生き残った者を計画に使用した
一つは、アカメが属していたゴズキによる教育
一つは、クロメが属していた洗脳と薬物投与によるドーピング
そして、頓挫して消えた改造計画が存在していた
今は、もう存在しない、その身に危険種の特性を宿していた特殊な一族がいた
帝国は自分達で危険種に相当する戦力を作り出せる魅力的な玩具を元に実験を開始した
一応、手術は完成したが、成功率は極めて低く、手術を施せる者は幼い子供に限定された
被検体はほぼ死んだ

プロジェクトで試練を越せず、しかし、生き残った落ちこぼれにその手術を施した
手術に耐え抜き、危険種の特性を発現させた子供は一割
残り九割は死に、あるいは使い物にならず、廃棄処分とされた
残った一割の子供は施設で、訓練を積み、洗脳し、帝国のために命を捧げる暗殺者となるはずだった
だが、そうはならなかった
何故か？
子供達が一斉に叛乱を起こしたのだと思われる
当事者の、子供達、研究者、警備、残らず死んでいたのだから
真相は闇の中だ
ただ一人を除いて
クビョウは真相を知っている
当事者であり、唯一の生き残りで、施設を終わらせた張本人であるクビョウは覚えている
クビョウの持つ危険種の特性は『危険を察知する』という誰も見向きもしない雑魚特性で、本人の身体能力が向上するということは一切なく、ベースとなったゼルテネスラビットも希少で滅多に捕まらないだけの小動物だった

当時、そんな彼女を危険視する者など誰もいなかった
死んでも思わなかっただろう
施設を抜け出し、帝国から逃げ仰せたクビョウは山で危険種を狩り、安息の地を得たが生態系の変化に気付いたシナズに拾われた
拾われる際に抵抗(殺そうと)したが逆に気に入られてしまったらしい
臆病であり、生存能力に長け、危険な相手を殺せると判断すれば、必ず殺す少女を
※※※
クビョウは危険を感じ、自身に害をなそうとする存在を消すために森を駆けていた
前方に大男が立っていた
クビョウはその大男が敵意を持っているようだから、ためらいなく斬った
「……!」
しかし、手に返ってきた感触は人を斬ったときのそれではなく、岩に弾かれたような痺れだった
クビョウは反撃を怖れて下がる
巨漢は追撃せずに言葉をかけてきた
「よぉ、そんなに急いでどこ行くんだ嬢ちゃん?」
「あの……邪魔なんですけど、退いてもらえませんか?」

「連れねぇこと言うなよ。嬢ちゃんの相手は俺なんだからよぉ！」

※　※　※

『歩』は侵攻する
数で圧倒している彼等に恐れはない
帝具使いであろうと圧殺してみせよう
さぁ、アジトが見えた
あぁ、敵が見えた
いざ、闘争だ
愛を、寵愛を得るために
或いは、自由を得るために
眼前の敵をいざ屠ろう

『歩兵』の進軍を前に、シナズは『蠢くもの』に指示を出した

「……！」

彼等の敗因は揃いも揃って、功を焦り、足元がお留守だったことだ
草に隠れて見えなくなっている蟻に気付けなかったことだ
蟻が一斉に弾けた

『歩兵』は宙を舞う
奇襲を仕掛けるはずだった彼等は足元からの奇襲を諸に食らう
足が千切れた
腕がもげた
首が飛んだ
臓腑が零れた
被害は増大
傷の浅い者もすぐには動けない
けれど、まだ生きている
スタイリッシュの命令に愚直に従い、芋虫のように『歩兵』は這う
「同じ轍は踏まないわ」
『蠢くもの』の容赦のない追撃が『歩兵』の頭部を抉った
一瞬で半分以上の『歩兵』が減らされた
「……？」
そのとき、シナズは不自然な風の流れを感じた
風で乱れた髪を整える女が恐ろしいものに見える
こちらも怪物を投入しているが、アレはどう動くかわからない

影で潜伏していたトローマは息を飲む
ナイトレイドに勝てるのか……？
そのとき、ナイトレイドのアジトに衝撃が走る
※　※　※
獣は巨軀だった
無駄な肉を削がれてなお、三メートルは下らない
『歩兵』はシナズに残らず足止めされた
しかし、爆発などなかったかのように獣はアジトに侵入した
シナズに気づかれることなく、その頭上を飛び越えて、その巨体をもってアジトに穴を開けた
透明化
怪物の姿はシナズの目に映っていなかった
爆発がなければ足音をとらえれただろう
怪物に与えられた命令が『あの建物の中にいる人間を食べちゃいなさい。あ、駄目。やっぱなし。生け捕りよ！
いい？』でなければシナズに向かっていた
その闘気に感づかれカウンターをもらっていただろう

しかし、それはたらればの話
怪物はアジトに踏み入り、侵入する際に巻き添えをくい吹き飛ばされていたタツミを発見し、爪を降り下ろした
「……ッ！」
いかにタツミが未熟な身であろうと駄々漏れの闘気に気付けないわけがない
何よりタツミはエスデスを魅せた才能の塊である
「オラァ！」
見えない爪撃を転がってかわすだけでなく、素早く跳躍して見えざる侵入者の首に剣を添えた
「グォ……！」
「……ッ!?」
人のものではない悲鳴が溢れる
されど、首を落とすに至らず、それどころか怪物は無傷でその姿を晒した
四つん這いのその怪物はタツミのよく知る鎧に身を守られていた
「その帝具はお前のもんじゃねぇだろ……ッ！」
「グルォォ」
鋭い闘志を燃やすタツミに怪物は低く唸る

※　※　※

「あら、やだ。大打撃じゃない」
『歩兵』の体内には爆弾が仕込まれている
不利になれば爆破する手があったが、爆発の範囲内にナイトレイドはいない
『歩兵』に仕掛けた小細工がおおよそ無駄になってしまった
スタイリッシュは『歩兵』が壊滅状態にあっても「勿体ない」程度の感想しか持っていなかった
兵隊の替えなどいくらでも効く
「奮発してきてよかったわ。第二陣、前へ」
今回持ってくる予定がなかったのはインクルシオを纏っている『フリークス』
もう一つは『フリークス』を元に改造した強化兵
「いいんですかスタイリッシュ様!?」
「あの一斉爆破は一度きりの初見殺しよ。二度目はないわ」
おそらくだけどね、と心の中で付け加える
「『と金』部隊、スタイリッシュに圧殺さない！」

※　※　※

「なぁんだ。クビョウが慌てて出ていったからどんなのヤバい奴かと思ったら雑魚ばっかじゃない」
「そうですないみたいですよ」
それは異形だった
殆どは二足歩行だったが、四つん這いのものがいれば四本腕だったり、腕も足もないものもいる
『フリークス』を元に改造された囚人共の成れの果ては己の空腹に従い、前進する
「何よあいつ等!?危険種!?こんなときに!?」
「ここ周辺の危険種は狩り尽くしましたし、敵の戦力じゃないですか?」
※　※　※
クビョウは背後から強化兵が詰めてきていることを感じ取っていた
あれは死を恐れない死兵だ
怖いから正面から相手にしたくない
下がることが出来なくなったクビョウはジリジリと前進する
カクサンの横を通り抜ければまだ時間は稼げる
しかし、不本意であり、やがてじり貧になる
カクサンの口角は吊り上がる

何度か剣を当てられたが、薄皮一枚にも届かない
逃げ道も『歩兵』で封じた
この相手は詰みだ
だから、とどめを刺そう
「おおおお!!」
カクサンは体を大きく広げ、クビョウを押し潰そうと全身を叩きつけた
カクサンが決着に出たことが分かっていても、クビョウは後退を許されず前に出るしかなく
水竜の剣は

「うえ……？」

「全身を鍛え上げているって言ってましたけど、口内はそうでもないみたいですね」
カクサンの口内を刺し貫いた
「は、はんで……？」
カクサンは、なんでと言いたかったが舌を斬られまともに発音できない
「答えましょう。本当に貴方の全身が鋼鉄のようであれば私に勝機はなかった。それな

ら私は貴方に恐怖を抱く、しかし、なかった。穴の在る鎧など怖くないでしょう?」
最後までカクサンはクビョウの答えを聞いた
何かを言おうとして、そして、死んだ
「でも、貴方が強化兵のような死兵であれば私は狂っていたかもしれませんね」
クビョウの独り言を強化兵だけが聞いたが、そんな言葉に意味はない
クビョウは風のように強化兵の合間を走り抜けた
※　※　※
「カクサンが……やられました」
「は?」
いやいや、いくらなんでも早すぎでしょう
カクサンに当てた相手はリミット付きの身体強化が精々の筈
剣を通さないカクサンを数分で倒すなんてどんな裏技を使ったというの!?
「敵が強化兵を無視して近づいてきます!」
「ご安心を!私達は将棋で言うところの金銀!」
「お守りします!」
いやいや、無理でしょう
アンタ達は諜報用

戦闘用じゃないでしょ
毒で止める？
毒が体に回る前に仕留められる
背を逃げる？
向こうの方が早いから追い付かれるのがオチね
奥の手を使う？
これしかないじゃないの？
「迷わず使えば死なずに済んだのに」
「え」
それは誰の声だったか
自分のか『耳』や『目』か
投擲された剣が顔に突き刺さったスタイリッシュには確認することは出来なかった
「ああ、怖かった」
スタイリッシュを殺したクビョウは安堵の息を吐き、自身に害をなすかもしれない雑兵の掃討戦に移った
それにアジトにいる敵は相手したくない
もしも、シナズ達が負けても、この距離ならば安全に逃げきれる